

今宿遺跡Ⅲ

姫路市

今宿遺跡Ⅲ

—(都)山吹線事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

兵庫県文化財調査報告
第395冊

2011(平成23)年3月
兵庫県教育委員会

兵庫県教育委員会

姫路市

今宿遺跡Ⅲ

—(都)山吹線事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011(平成23)年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は兵庫県姫路市西今宿3丁目に所在する、今宿遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(都)山吹線事業に伴うもので、兵庫県中播磨県民局姫路土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成19年度に本発掘調査を実施した。
3. 出土品整理は、平成21・22年度に兵庫県立考古博物館が実施した。
4. 道構の航空写真撮影は三和航測株式会社に委託して実施した。
5. 写真は道構については調査員が撮影し、遺物については㈱タニダチ・フォトに委託した。
6. 本書に用いた図のうち、第1図は国土地理院発行1/200,000地勢図「姫路」を、第4図は1/25,000地形図「姫路北部」、「姫路南部」を使用した。
7. 本書の執筆・編集は長濱が行い、佐々木智子が編集を補助した。
8. 本書にかかる写真・図面、遺物は兵庫県立考古博物館および魚住分館に保管している。
10. 発掘調査および報告書作成にあたり下記の方々にご教示、ご指導を頂いた。記して感謝の意を表します。

凡　　例

1. 本書に使用した方位は、国土座標(第V系)の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面(T.P.)を基準とした。
2. 道構は種類ごとに以下の略号を用い、番号は各地区的道構ごとに1～の通し番号としている。
S B : 挖立柱建物跡　　S K , S X : 土坑　　S D : 溝　　P : 柱穴・柱穴状道構
2. 土層色調名および土器の色調名は小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帳』1999年度版によった。
3. 遺物番号は本文・図版・写真図版とも同一として通し番号としている。
また鉄製品には「M」を冠し、遺物の種類ごとに通し番号としている。
4. 土器・土製品の実測図のうち、須恵器の断面を黒塗りにしている。

本文目次

例言

第1章 調査にいたる経緯	1
第1節 調査の契機	
第2節 発掘調査の経過と体制	
第3節 出土品整理作業の経過と体制	
第2章 遺跡の環境	5
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 調査の結果	9
第1節 A地区の遺構と遺物	
第2節 B地区の遺構と遺物	
第4章 総 括	15

挿図目次

第1図 遺跡の位置	iv
第2図 (都)山吹線関連調査区の位置	2
第3図 本書にかかる今宿遺跡および山吹遺跡の位置	3
第4図 今宿遺跡周辺の遺跡	6
第5図 出土金属器実測図	14
第6図 出土金属器	14
第7図 土師器皿底部の圧痕	15
第8図 今宿遺跡遺構全体図	17
第9図 山吹遺跡と調査区	18

表 目 次

第1表 遺跡地名表	7
-----------------	---

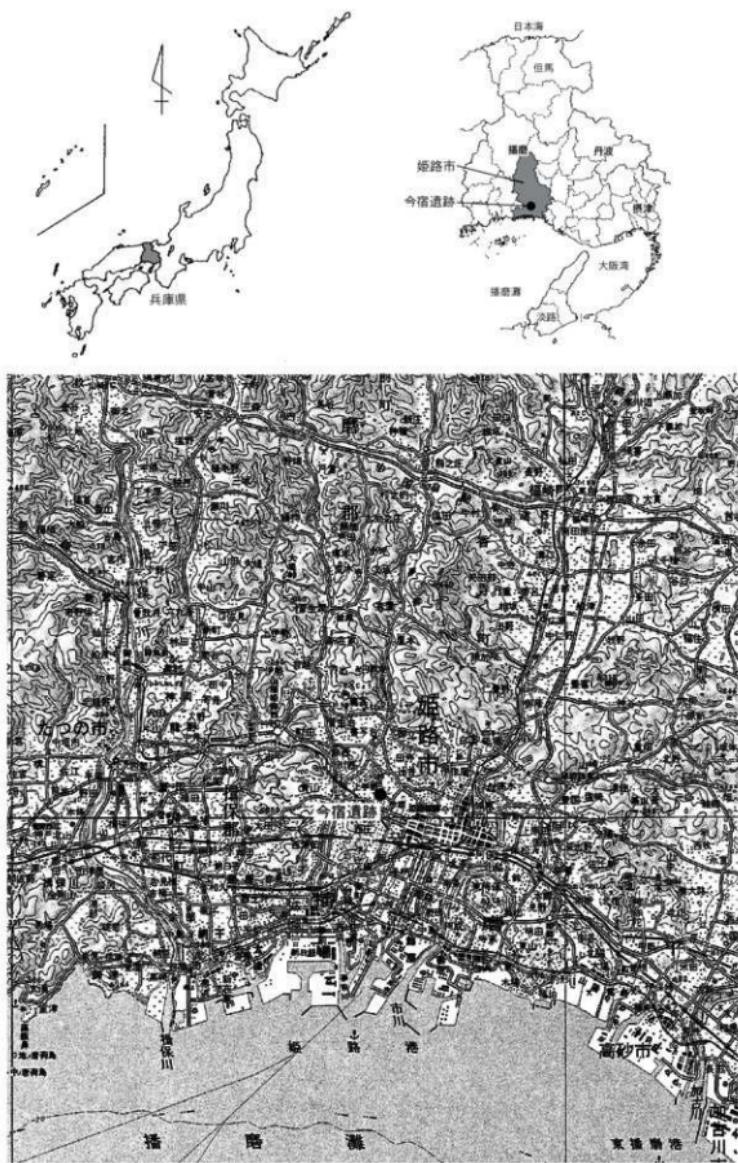
図版目次

図版1 調査区全体図

- 図版2 A南区 全体図
図版3 A南区 遺構図（1）
図版4 A南区 遺構図（2）
図版5 A南区 遺構図（3）
図版6 A南区 遺構図（4）
図版7 A北区 全体図・遺構図
図版8 B南区 全体図・遺構図
図版9 B北区 全体図・遺構図
図版10 出土遺物（1）
図版11 出土遺物（2）
図版12 出土遺物（3）

写真図版目次

- 写真図版1 遺跡 遺跡の遠景・調査区遠景
写真図版2 A南区 全景
写真図版3 A南区 全景・全景
写真図版4 A南区 全景・西壁断面
写真図版5 A南区 SX01・SX01断面・SX01完掘状況
写真図版6 A南区 SX02断面・SX03・SX03断面
写真図版7 A南区 SE01・SE01断面・SE01石組
写真図版8 A南区 SK01・SK07・SK04縦検出状況・SK04完掘状況・SK06土器出土状況・SK06完掘状況・SD01断面・SD02断面・SD04断面・P22土器出土状況
写真図版9 A北区 第1面全景・第2面全景・第1面SD01断面・第2面SD02断面・第2面SK01断面・西壁断面
写真図版10 B区 全景
写真図版11 B区 全景・全景
写真図版12 B南区 全景・全景・東壁断面・南壁(SD01)断面
写真図版13 B南区 P01・SK01・P01断面・SK01断面・SD01断面・SD02断面
写真図版14 B北区 全景・全景・東壁断面・SD01断面
写真図版15 出土土器（1）
写真図版16 出土土器（2）
写真図版17 出土土器（3）
写真図版18 出土土器（4）
写真図版19 出土土器（5）
写真図版20 出土瓦（1）
写真図版21 出土瓦（2）
写真図版22 出土瓦（3）



第1図 遺跡の位置

第1章 調査にいたる経緯

第1節 調査の契機

都市計画道山吹線は、姫路市西今宿3丁目を起点として姫路市山吹1丁目を終点とする延長864m、幅員16mの自転車歩行者道付の2車線道路である。姫路市中心市街地を東西に通過する国道2号から市街地北部を結ぶ南北幹線道路で、姫路市中心部に集中する交通を分散させ、渋滞を解消し、道路交通の円滑化をはかるとともに、自転車歩行者道を整備することにより歩行者や自転車の安全確保を目的として事業が計画された。

事業は平成4年に計画され、当初平成18年度の供用予定で平成9年度以降用地買収を進めた。この事業の進捗に合わせて継続的に埋蔵文化財の調査を実施してきた。

これら発掘調査成果は、平成17~19年度に出土品整理事業を行い、「今宿遺跡Ⅰ」（兵庫県文化財調査報告第333冊）、「今宿遺跡Ⅱ・山吹遺跡」（兵庫県文化財調査報告第332冊）として平成19年度に刊行されている。

「今宿遺跡Ⅰ」兵庫県文化財調査報告第333冊

今宿遺跡のうち平成14年度確認調査、平成14・15年度本発掘調査分を収録

「今宿遺跡Ⅱ・山吹遺跡」兵庫県文化財調査報告第332冊

今宿遺跡は、平成13年度確認調査、平成13・14年度本発掘調査実施分の2地区を収録。

山吹遺跡は、平成9・15年度確認調査、平成10・13・16年度に本発掘調査実施分の3地区を収録。

既調査の出土品整理作業が佳境となった平成19年度に工事未着手箇所の事業が進捗することとなつた。地点は今宿遺跡平成14年度調査区と山吹遺跡平成16年度調査区の間である。

兵庫県教育委員会と兵庫県姫路土木事務所とが埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を行い、事業対象地は周知の遺跡である今宿遺跡、山吹遺跡の範囲内であることから確認調査を実施した。埋蔵文化財の有無を確認し、存在が確認された地点については、記録保存を前提とした本発掘調査に移行することとなつた。

第2節 発掘調査の経過と体制

1. 確認調査の概要

遺跡調査番号 2007099

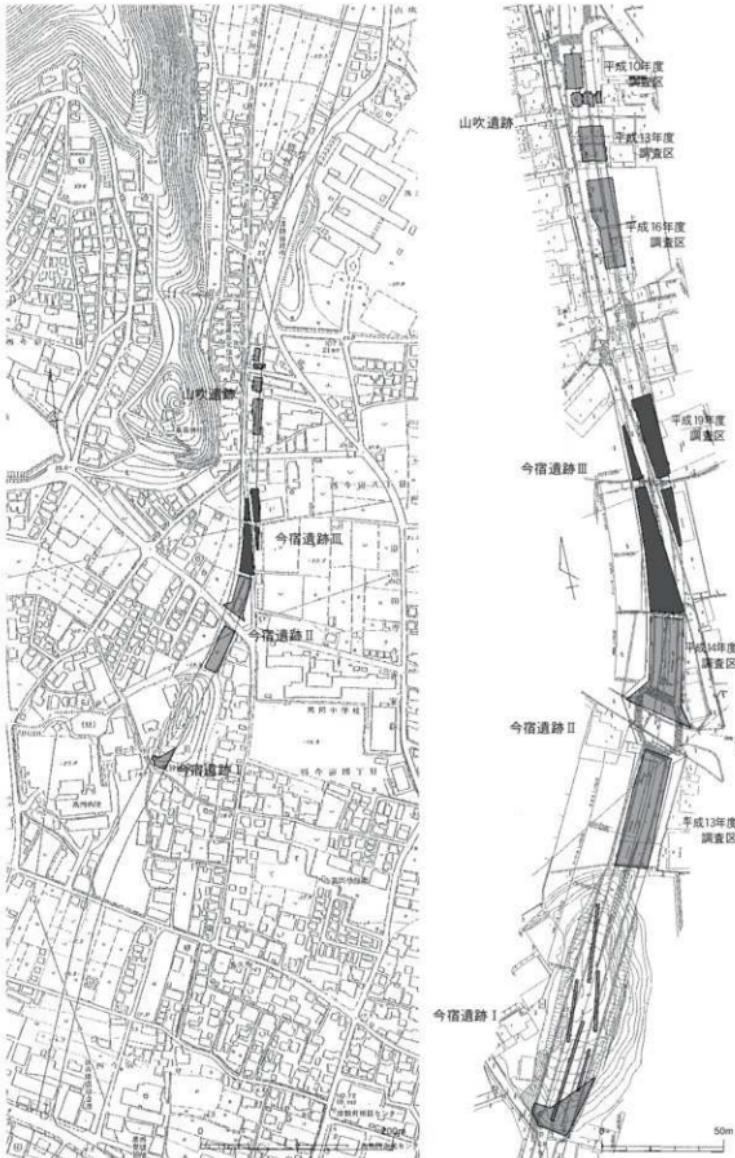
調査年月日 平成19年8月28日

調査担当 深江英憲

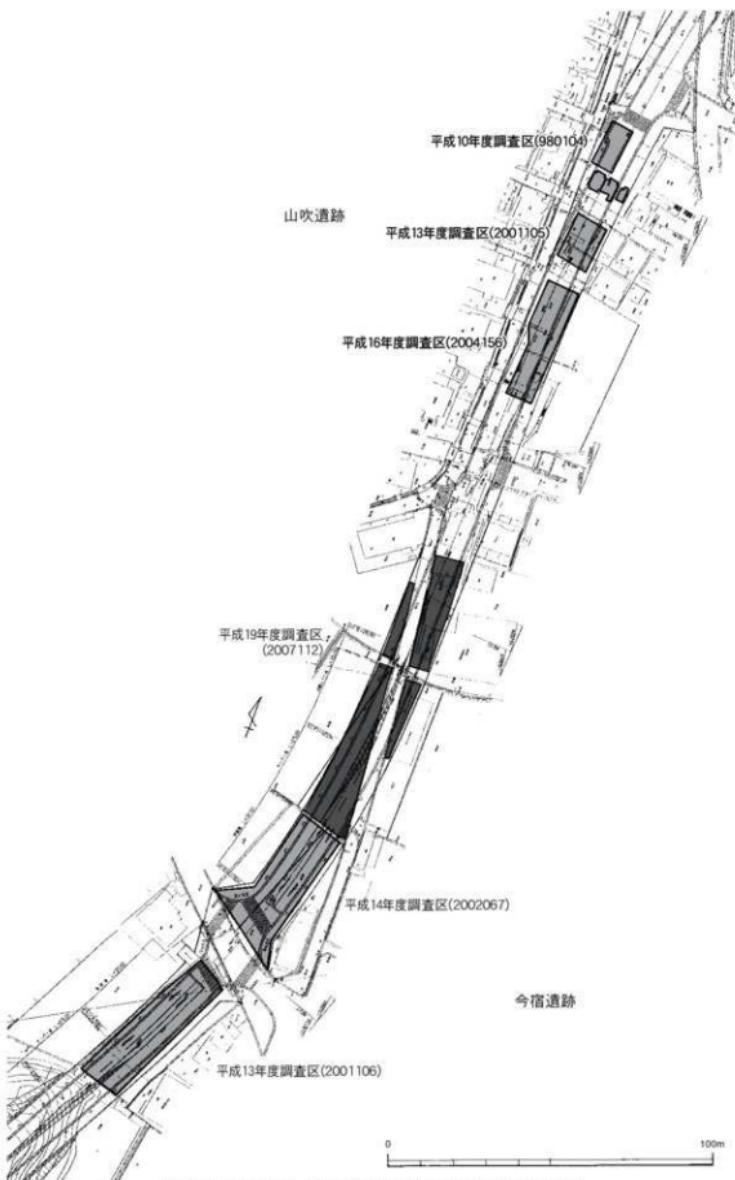
遺跡調査番号 2007063

調査年月日 平成19年5月23日

調査担当 山田清朝



第2図 (都) 山吹線関連調査区の位置



第3図 本書にかかる今宿遺跡及び山吹遺跡の調査区配置図

2. 本発掘調査の概要

2度の確認調査の結果、山吹遺跡平成16年度調査区南側については遺構・遺物は確認できなかったが、今宿遺跡平成14年度調査区北側については遺構・遺物を検出したため、本発掘調査に移行した。

遺跡調査番号 2007112

調査期間 平成19年12月18日～平成20年2月21日

調査面積 858m²

調査の体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査専門員 吉田 昇

調査担当 深江英恵

調査担当 渡辺 昇・長濱誠司

第3節 出土品整理作業の経過と体制

本発掘調査実施時においては、今宿遺跡の既調査分の出土品整理作業は報告書刊行に向け作業が進行していたことから、既調査と合わせて報告することは不可能であった。そこでこれらとは別に『今宿遺跡Ⅲ』として出土品整理を行うことになった。

出土品整理作業は発掘調査と平行して現地にて遺物の洗浄など行っていたが、本格的な作業は、平成22年度に県立考古博物館に遺物を搬入して開始した。単年度で遺物の水洗からレイアウトまでの諸作業を行い報告書刊行に至った。

整理の体制

事務担当 篠宮 正

工程管理担当 山本 誠

保存処理担当 岡本一秀

整理担当 長濱誠司

非常勤嘱託員 烏村順子 又江立子 宮野正子 萩野麻衣（接合・補強、復元）

友久伸子 杉村明美 佐々木智子（実測・拓本、図補正、トレース、レイアウト）

長濱重美 前田恵梨子 浜脇多規子 桂 昭子（保存処理）

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

今宿遺跡の所在する姫路市は兵庫県の中西部に位置する。その南側は瀬戸内海に面し沖合に家島諸島が点在する。また北側は標高200m級の山地が東西に広がっている。近代に入り姫路県、飾磨県を経て兵庫県に編入、1889(明治22)年に市制が敷かれる。その後周辺の町村を合併して市域を拡大、さらに「平成の大合併」により2006(平成18)年に飾磨郡夢前・家島町、神崎郡香寺町、宍粟郡安富町と合併し面積534.27km²の現在の市域が形成される。また1996(平成8)年には中核都市に移行している。市街地は市川などの河川によって形成された県内有数の平野に位置する。1600(慶長5)年池田輝政によって築かれた姫路城の城下町から発達したものである。近代以降大阪鎮台営所、師団司令部と尋常中学校、高等学校などが設置され、播磨地域の政経中枢都市であるとともに、県庁所在地である神戸市に次ぐ主要都市として歩んでいる。

調査対象地である姫路市西今宿は市街地の西側に位置する。かつては今宿村の一部であったが近世以降分村と合併を繰り返しつつ、昭和10年に姫路市と合併する。地区内を古代・中世山陽道が通過し、現在も国道2号が東西に通過している。また古代山陽道から分岐する美作道の分岐点を今宿付近とする説もある。中世には山陽道から山陰方面への分岐であったことが『太平記』に記述されており、各時代を通して交通の要衝でもあった。また近代に入ると鉄道が敷設され、姫路と岡山県津市を結ぶ姫津線が開通、同線はさらに新見市まで延伸され姫新線となる。姫新線は調査区南側を通過している。

調査対象地の西側を南流する夢前川は播磨の主要河川の1つである。姫路市夢前町の雪彦山を源とし、市街地の西側を南流して瀬戸内海に注ぐ、全長約40kmの河川である。現在の河道は江戸時代初期に整備されたもので、それ以前は河道も定まらず今宿付近にも分流があったという。

第2節 周辺の歴史的環境

旧石器・縄文時代

旧石器時代は採集遺物があるのみである。

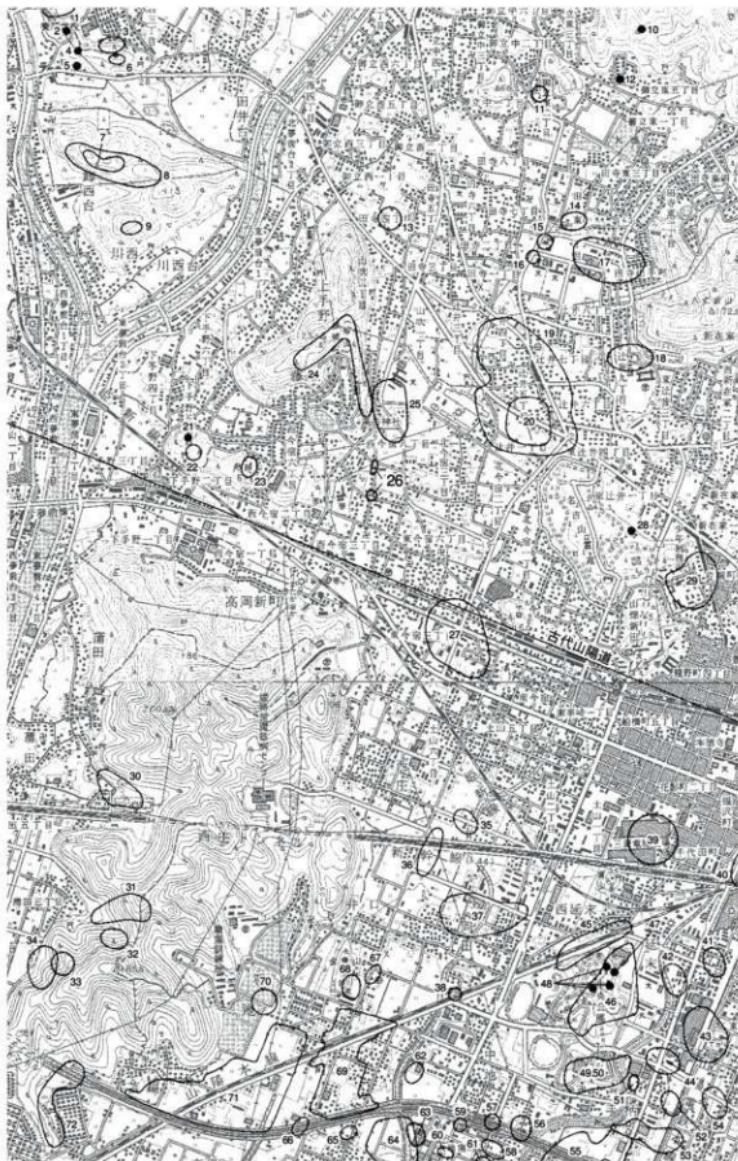
縄文時代の遺跡は市街地の西側に集中している。辻井遺跡(19)は中期の屈葬された人骨、晩期の土器棺などが検出された著名な遺跡である。今宿丁田遺跡(27)では後期前半の埋甕、土坑が検出されている。英賀保駅周辺遺跡第4地点(71)では後期の土器が出土し、付近に生活跡があるものと推定される。堂田遺跡(38)でも晩期の土器が出土している。

弥生時代

弥生時代に入ると遺跡数は増大する。遺跡は長期にわたり存続し、規模の大きいものが多く、この地域が播磨の中心であったことを物語っている。

前期後半から始まる遺跡に千代田遺跡(39)、八反長遺跡(37)がある。

今宿丁田遺跡(27)、辻井遺跡(19)では中期の住居跡が検出される。船場川東区整遺跡は集落が弥生時代中期以降古墳時代まで存続し、多数の住居跡が検出される。この時期、注目する遺物として銅鐸鋳型の出土がある。名古山遺跡(28)では住居内から製錠文銅鐸、今宿丁田遺跡(27)では扁平紐式四区画製錠文銅鐸の石製鋳型が出土している。仮称大井川区整地内第6地点では銅鐸破片、鋳型などが出土地、現市街地の西側に銅鐸などの生産拠点が存在した可能性がある。



第4図 今宿遺跡周辺の遺跡

第1表 道跡地名表

番号	道跡番号	道跡の名称	道跡の所在地	時代	種類
1	020132	町田池道跡	船橋市町田	縦文～弥生	散歩地
2	020141	裏尾山古墳群	船橋市町田	古墳	古墳
3	020132～020140	裏尾山古墳群	船橋市書写台3丁目	古墳	古墳
4	020143	裏尾山古墳群	船橋市町田一丁目	平安～中世	墳墓
5	020144	裏尾山古墳	船橋市町田		散歩地
6	020142	裏尾山古墳群	船橋市書写	弥生	墳墓
7	020148	飾西東山道跡	船橋市書写～書写	弥生	集落
8	020145～020147	巣山古墳群	船橋市書写～書写	古墳	古墳
9	020149	巣西東山道跡群	船橋市書写～上野	弥生	墳墓
10	020195	山田古墳	船橋市御立東4丁目	古墳	古墳
11	020847	前山道跡	船橋市御立東2丁目	弥生	散歩地
12	020201	大浦古墳	船橋市御立東2丁目	古墳	古墳
13	020200	河野道跡	船橋市寺谷2丁目	弥生	散歩地
14	020199	番留道跡	船橋市寺谷2丁目	弥生	散歩地
15	020198	下鶴道跡	船橋市田谷2丁目～田寺東2丁目	弥生	散歩地
16	020197	原の下道跡	船橋市田谷2丁目～田寺東2丁目	弥生	散歩地
17	020196	大谷口1道跡	船橋市田寺東2丁目～田寺山手町	縦文～弥生	散歩地
18	020899～020865	山崎山古墳群	船橋市北青2丁目	古墳	古墳
19	020162	江井道跡	船橋市北1丁目～7丁目	縦文～弥生、奈良	集落
20	020163	江井廢寺	船橋市北1丁目～5丁目	奈良～平安	寺院
21	020150	秩父山古墳	船橋市下手町2丁目	古墳	古墳
22	020151	秩父山道跡	船橋市下手町2丁目	弥生	散歩地
23	020152～020156	船越山古墳群	船橋市下手町2丁目	古墳	古墳
24	020156～020159	鷺山古墳群	船橋市山吹2丁目	古墳	古墳
25	020160	山吹道跡	船橋市山吹2丁目	古墳～奈良	
26	020161	今宿道跡	船橋市西今宿5丁目	奈良	
27	020165	今宿丁田道跡	船橋市東今宿1丁目～4丁目	縦文～奈良	集落
28	020164	名古山道跡	船橋市名古山町	弥生	集落
29	020572	岩瀬町道跡	船橋市岩瀬町	弥生	集落
30	020377	瀬田道跡	船橋市広瀬田瀬田	奈良	散歩地
31	020378～020385	山所群集墓	船橋市広瀬田瀬田	古墳	古墳
32	021396	山所道跡	船橋市広瀬区瀬田	弥生	散歩地
33	020387	山所営寺	船橋市広瀬区瀬田	奈良	寺社
34	020388	山所南山道跡	船橋市広瀬区瀬田2丁目	弥生	散歩地
35	020452	土山道跡	船橋市西庄	弥生	散歩地
36	020453	町田道跡	船橋市岡田	古墳	散歩地
37	020446	八反丘道跡	船橋市岡田	弥生	集落
38	020445	豊田道跡	船橋市岡田	縦文	散歩地
39	020453	千代田道跡	船橋市千代田町	縦文～弥生	散歩地
40	020456	南畠町道跡	船橋市南畠町	弥生	集落
41	020454	村岡道跡	船橋市延末1丁目	弥生	散歩地
42	020441	楓駒道跡	船橋市延末	縦文～古墳	集落
43	020440	黒木道跡	船橋市東延末	弥生～古墳	散歩地
44	020439	小山道跡	船橋市延末	弥生～古墳	集落
45	020444	西延末道跡	船橋市西延末	弥生	集落
46	020442～020873～020883	手柄山古丘群集墓	船橋市西延末	古墳	古墳
47	020443	手柄山古丘頂上古墳	船橋市西延末	古墳	古墳
48	020872	手柄山古丘道跡	船橋市西延末	旧石器～古墳	散布地・集落
49	020884	手柄山古丘道跡	船橋市西延末	弥生	集落
50	020885～020888	手柄山古丘群集墓	船橋市西延末	古墳	古墳
51	020438	牛矢神社道跡	船橋市手柄	弥生	散歩地
52	020436	酒田道跡	船橋市手柄	弥生	散歩地
53	020435	竹の根道跡	船橋市手柄	弥生～古墳	散歩地
54	020437	古屋敷道跡	船橋市手柄1丁目	弥生～古墳	散歩地
55	020432	佐舟・船場川東区豊道跡 第6地点	船橋市佐舟	縦文～中世	集落
56	020414	長坂道跡	船橋市田畠	弥生～古墳	集落
57	020415	堀東道跡	船橋市中地	弥生	集落
58	020413	東久保道跡	船橋市中地南町	弥生	散歩地
59	020416	西久保道跡	船橋市中地南町	弥生	散歩地
60	020417	中地大寺道跡	船橋市中地南町	弥生～中世	集落
61	020412	大町道跡	船橋市西御前橋5丁目	弥生	散歩地
62	020447	丁田道跡	船橋市町坪～中地	弥生～古墳	集落
63	020419	中ノ町道跡	船橋市玉手	弥生	散歩地
64	020430	御称・大舟川区豊地内虎跡 第1地点	船橋市玉手	弥生～中世	集落
65	020421	御称・大舟川区豊地内虎跡 第2地点	船橋市玉手	中世	集落
66	020575	美質保御辺道跡第2地点	船橋市玉手	中世	集落
67	020449	村前道跡	船橋市舟ノ口	弥生	散歩地
68	020448	法輪寺古道跡	船橋市舟ノ口	弥生	散歩地
69	020576	英賀保御辺道跡第3地点	船橋市町坪	平安～中世	集落
70	020450	四つ池道跡	船橋市芦ヶ瀬・町坪	古墳	散歩地
71	020578	英賀保御辺道跡第4地点	船橋市芦ヶ瀬・町坪・御前橋高町	平安～中世	集落
72	020392～020395～020765～020768	付城山崩塙	船橋市芦ヶ瀬	古墳	古墳

弥生時代後期の遺跡としては今宿遺跡とともに西延末遺跡(45)、今宿丁田遺跡(27)があり住居跡を検出している。八反長遺跡(37)では後期末から古墳時代初頭の方形周溝墓が検出される。

古墳時代

播磨の大河である市川下流域の東岸では前期から後期にわたる首長墓の変遷がうかがえるが、夢前川沿いには首長墓と呼べる顕著な前・中期古墳ではなく、大津茂川、揖保川までの空白地となっている。

後期古墳は山崎山古墳群(18)、手柄山北丘群集墳(46)など丘陵上などに所在する横穴式石室を内部施設とする群集墳の調査が行われている。

長越遺跡(56)は船場川沿いの微高地上に立地する古墳時代初頭～前期の集落であり山陰など各地からの搬入土器が多く出土している。

古代

今宿遺跡の一带は、この時期播磨国飾磨郡に属していた。飾磨郡は16里からなる大郡であり、播磨国府が所在した。本町遺跡は検出した建物群や出土瓦から播磨国府の一部と推定されている。また近隣の豆腐町遺跡では掘立柱建物群、井戸などを検出し、出土遺物からも播磨国府、飾磨郡衙に関連する遺跡と推定される。播磨国分寺と圓分尼寺は市川左岸にある。

播磨は仏教文化をいち早く受容した地域であり、多くの古代寺院が知られている。古代寺院は市之郷庵寺が飾磨郡内最古の寺院とされ、調査対象地付近には辻井庵寺(20)がある。辻井庵寺は水田内に原位置を保つ塔心礎があり、発掘調査の結果法隆寺式伽藍配置であったことが想定される。今宿遺跡(26)では調査で多量の瓦が出土し、これまで未確認だった「今宿庵寺」が調査地点に隣接して存在することがほぼ確実となった。

飾磨郡西部から揖保郡東部にかけては青山窯跡群、桜峠窯跡群、打越窯跡群、大池窯跡群、赤坂窯跡群、峰相口窯跡群などがあり6～8世紀に須恵器などを生産している。打越窯跡、赤坂1号窯は瓦陶兼業窯であるが、特徴的な遺物として蓮華文帶鶴尾がある。これらの窯跡で生産された瓦や蓮華文帶鶴尾は上記の寺院をはじめとする飾磨・揖保郡の寺院に供給される。

古代山陽道は飾磨郡を通過していたが、市街地化が進むこともあり、復元ルートは充分に解明されていない。国府に隣接して草上駅が所在したとされ、そこが古代山陽道と美作道の分岐点となっていた。草上駅の所在地は明らかでないが、今宿丁田遺跡(27)は有力な比定地である。調査区北側の山腹には式内社である高岳神社が所在するが、もとは別の場所にあったものが移転したと伝えられる。

中世以降

律令体制の崩壊とともに国府の機能も衰退していくが、鎌倉時代に入ると播磨守護所が加古川に移り、完全に衰退し姫路が播磨の中心でなくなる。

姫路が播磨の中心として復活するのは姫路城築城を待たねばならない。姫路城は黒田氏による初期姫路城、羽柴秀吉による改築や初期城下町の整備を経て1600年に池田輝政により姫路城や城下町が整備される。そして今日まで続く市街地が形成され、播磨の政経中枢となる。

第3章 調査の結果

第1節 A区の遺構と遺物

1. A南区

掘立柱建物・柱穴

調査区中央付近に柱穴がまとまって分布している。掘立柱建物として3棟復元できたが、遺構面が削平されているためか遺存状況は良好でない。

柱穴出土遺物

柱穴からは土師器・須恵器片が出土しているが、細片が多く大半は図化しえなかった。

1・2は須恵器捏鉢である。1はP6から、2はP22から出土した。いずれも直線的な体部で口縁端部を上方に拡張させる。3・4は土師器皿である。3は平底の底部から口縁部が短く立ち上がる。

SBO1 (図版3)

調査区中央付近で検出した。建物内にSX02とSK04があるが、主軸方向が異なることから建物に併存するものではないと考える。2間以上(8.2m)×3間以上(8.0m)の東西棟の個柱建物である。東側は調査区外へ延びる。桁行はN-8°Eの方向を示す。平行する2列の柱穴列として把握できるが、柱穴の欠損があり、柱穴の並びもやや不揃いである。柱間は1.8~2.5mを測る。柱穴は掘方の径30~50cm、深さ50cm以下である。

SBO2 (図版3)

SX01南側で検出した。2間以上(5.2m)×3間以上(7.8m)の東西棟の個柱建物である。北辺おおび東辺のみL字状に検出した。全容は明らかでないが、横などの可能性もある。SX01、SK05と重複するが、先後関係は不明である。桁行はN-12°Eの方向を示す。平行する2列の柱穴列として把握できるが、柱穴の欠ける部分があり、並びもやや不揃いである。柱間は2.0~2.8m前後を測る。柱穴は掘方の径25~40cm、深さ50cm以下である。

SBO3 (図版3)

SBO1・O3の間で検出した。1間以上(2.0m)×4間以上(9.3m)の東西棟の個柱建物である。北辺と東辺のみL字状に検出した。全容は明らかでないが、横などの可能性もある。SX01とSK05と重複するが、先後関係は不明である。東側は調査区外へ延びる。桁行はN-11°Eの方向を示す。平行する2列の柱穴列として把握できるが、柱穴の欠ける部分があり、並びもやや不揃いである。柱間は2.0~2.5mを測る。柱穴は掘方の径30~40cm、深さ40cm以下である。

土坑

SXO1 (図版4 写真図版5)

SBO2・O3間で検出した。平面は不整な方形を呈し南北辺はN-13°Eを示す。規模は一辺4m、深さは40cmを測る。断面は逆台形を呈し、底部は平坦である。黄褐色のシルト質細砂を埋土とし、下層には多量の礫とともに土器片、古代を主体とした瓦片などの遺物を包含している。

出土遺物

5~12は土師器皿で、小(5・6)と大(7~12)がある。5・6は平底の底部から口縁部が短く立ち

上がる。底部には放射状の圧痕が残る。7～9は平底ぎみの底部から屈曲して口縁部が立ち上がる。10～12は口径に対し器高が大きく碗状を呈し、特に11・12は底部が丸底となるようである。底部外面に放射状に台の圧痕が残る。

13は瓦質羽釜である。鍔は短くほぼ水平に取り付けられる。14は瓦質の不明製品である。平らな底部に隅丸方形の高台を貼り付ける。浅鉢の一種か。15は青磁碗である。

M 1は和釘である。断面は一辺0.5cm程度の方形を呈する。M 2は破片のため全容は明らかにしがたいが、丸みをみつめた鐵鍋の底部に近い部分ではないかと考える。

S X O 2 (図版4 写真図版6)

調査区中央部、東壁際で検出した。調査区外へ広がるため全容は明らかではない。S K O 4と重複し、断面観察ではS K O 4埋没後に本遺構を掘削している。南北3.1m、東西2.4m以上の方形を呈する。南北方向はほぼ正方位を示す。深さは0.1m程度で断面は台形を呈し、底部は平坦である。底面では柱穴を7基検出したが、意図的な配列はみられない。

出土遺物

16・17は土師器皿。16は口径に対し器高が大きく碗状を呈する。17は手づくね成形の後、口縁部に弱い横ナデ調整を行う。18は古瀬戸鉢皿である。

S X O 3 (図版5 写真図版6)

調査区南半部の東壁際で検出した。大半を検出したが、一部は調査区外へ広がる。平面が不整な楕円形を呈し、規模は5.6m×4.4m以上である。深さは0.2m程度で断面は皿状を呈する。黒褐極細砂を埋土とし、基盤土のブロックや礫・土器片を包含する。

出土遺物

20・23は土師器皿である。20・21は平底の底部から口縁部がわずかに立ち上がる。22・23は器高が高く杯状を呈する。

S K O 1 (図版6 写真図版8)

平面は東西方向に主軸をもつ楕円形であり、規模は105cm×85cmである。深さは12cmで断面は浅いU字状を呈する。

S K O 4 (図版4 写真図版8)

調査区中央部、東壁際で検出した。遺構のかなりの部分が調査区外へ広がるため全容は明らかではない。S X O 2と重複し、断面観察では本遺構埋没後にS X O 2が掘削される。平面は南北方向に主軸をもつ楕円形を呈すると思われ、規模は南北2.3m、東西の検出長1.1mを測る。断面は浅いU字状を呈するが、南側の立ち上がりは緩やかである。土坑内で礫の集積を検出したが、いずれの礫も底に接するものではなく、埋没途中で流入したものと推定する。

出土遺物

19は土師器皿。口径に対し器高が大きく碗状を呈する。

S K O 5 (図版5)

調査区中央付近、東壁際で検出した。東半部が調査区外へ広がるため全容は明らかでない。S B O 3と重複する可能性があるものの先後関係は明らかでない。平面は東西方向に主軸をもつ不整楕円形を呈するとみられ、南北1.9m、東西の検出長1.2mを測る。検出面からの深さは10cm程度である。底部は凹

凸があり自然の落ち込みの可能性もある。

出土遺物

25~30は土師器皿で、大型(28~30)と小型(25~27)のものがある。25~27は器高が低く口縁部の立ち上がりがわずかである。いずれも底部外面には放射状に台の圧痕が残る。28~30は器高が高く口縁端部は外反する。

SK06 (図版5 写真図版8)

SK05の南側約2mで検出した。土層の堆積状況からSK05より本遺構が後出している。主軸が北西→南東方向に向く楕円形を呈し、東側は調査区外へ続く。南北0.8m、東西の検出長0.4mを測る。深さは20cm程度である。北西隅に礫と土師器小皿片が集積していたが、土坑底より一段盛ることから、柱穴など別の遺構が切り合い、その遺構に伴うもの可能性がある。

出土遺物

土師器皿片がまとまって出土し、うち3点を実測した。31は弱いナデで口縁部を仕上げる。32は器高が低く口縁部の立ち上がりがわずかである。33は平底で口縁部が外反する。その他に須恵器捏鉢片が出土している。

SK07 (図版6 写真図版8)

調査区南半で検出した。平面は不整な長方形を呈し、主軸方向はほぼ南北を向く。規模は1.9m×1.5mを測る。深さは10cmと浅く断面は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルト質極細砂で、基盤層のブロックや礫が混じる。

出土遺物

34は須恵器鉢の底部である。平底の底部から体部が直線的にのびる。他に土師器鍋の体部と思われる破片が出土している。

井戸

SEO1 (図版6 写真図版7)

調査区南端で北端を検出した。遺構本体は平成14年度調査区との間にあり、平面検出後、断ち割りにより調査を行ったが、その途中で石組が崩壊し、隣接地に影響が及ぶことから調査を放棄し、埋め戻さざるを得なかつた。

埋土は砂利を主体とし、その中に土器片や瓦片を含む。掘方の径3.5mを測り、石組に用いる礫は1mを越えるものがある。

出土遺物

35は瓦質土器三足鍋の脚部である。36は瓦質土器羽釜である。胴部から直線的に口縁部に至る。鍋部は短くほぼ水平に取り付けられている。37は備前焼播鉢で口縁端部は上方に拡張する。他に須恵器壺・捏鉢片が出土しているが、他の遺構から出土の多い土師器皿は掘削できた範囲では出土していない。

溝

SDO1 (図版6 写真図版8)

調査区北半で検出した東西方向に延びる溝である。西側は調査区外へ延び、東側は調査区内で終結する。幅18m、深さ10cm程度である。断面は皿状を呈する。

遺物は埋土内から土師器細片のみが出土した。

S D O 2 (図版6 写真図版8)

調査区北半で検出したやや弧状に東西方に向延びる溝である。西側は調査区外へ延び、東側は調査区内で収束する。幅0.3m、深さ15cm程度である。断面はU字状を呈する。

古墳時代に属すると思われる須恵器高杯片が出土したが、図化しえなかった。

S D O 4 (図版6 写真図版8)

調査区南半で検出した南西-北東方向に延びる溝である。南西側は調査区外へ延び、北東側は調査区内で収束する。幅0.8m、深さ30cm程度である。断面はU字状を呈する。

遺物は出土していない。

2. A北区

調査区南半部は擾乱により造構面が損なわれていたが、北半部では造構面が上下2面の造構面が確認できた。

a. 第1面

S X O 1 (図版7)

平面は不整規円形を呈し主軸は南北に向く。南北1.7m、東西1.2mを測る。深さは5cm程度で断面は皿状を呈する。

遺物は出土していない。

S X O 2 (図版7)

平面は不整な隅丸長方形を呈し主軸は南北に向く。南北2.3m、東西1.5mを測る。深さは7cm程度で断面は皿状を呈する。

遺物は出土していない。

S D O 1 (図版7 写真図版9)

南北方向に直線的にのび、偏りはN-4°Wの方向を示す。北側は調査区外へ続き、南側は調査区内で終結するが、その延長上にS X O 1・O 2を結ぶような溝状の造構があり、本来は同一の溝であったと考えられる。規模は幅40cm、深さ8cmを測る。

遺物は出土していない。

b. 第2面

S K O 1 (図版7 写真図版9)

S D O 2と重複し本造構が切られている。平面は半円状に検出したが、本来は円形を呈するのである。径70cm、深さ18cmを測り断面は浅いU字状を呈する。埋土は黒色シルト質極細砂で円礫が混じる。

遺物は出土していない。

S D O 2 (図版7 写真図版9)

南北方向に直線的にのび、偏りはN-4°Wの方向を示す。北側は調査区内で終結し、南側は擾乱により損なわれる。規模は幅50cm、深さ10cmを測る。断面は浅いU字状を呈する。

埋土内から陶器擂鉢片、白磁片が出土したがいずれも細片である。

3. A区包含層、その他

包含層

38はA区包含層から出土した須恵器甕である。口縁端部を上下に拡張し面をもつ。

M3は和釘である。断面は一辺0.5cm程度の方形を呈し、折り返した形状の頭部が残存する。

出土瓦

瓦はA南区SX01、SK03・07、SE01などから79点以上出土した。大半は古代に属する瓦である。遺構ごとに取り上げたが、いずれも出土した遺構の時期を示すものではなく、細片のため瓦の規模がわかるものはない。そこで『今宿I』で行った分類を参考し、凸面の調整から選択し掲載した。

44～48はSX01から出土した。44は凸面に横方向の平行条線で施文、凹面は布の痕跡が残る。45は凸面に斜格子タタキで、一部の格子の中に「+」文があり、K13類と同じものである。凹面には布目が残る。46・47は無文タタキで46は隅角部を角取りする。48は巴文軒丸瓦左巻三巴文で珠文は12個である。丸みをもつ巴頭から尾部が長くのび互いに接する。

49・50はSX03から出土した。49は凸面に縱方向の繩タタキを施し凹面に枀板痕が残る。50の凸面は無文タタキである。

51～53はSE01から出土した。51は凸面に斜格子K16類か。52は軒平瓦だが文様は残存しない。外縁左幅は2cmを測る。53は伏間瓦であろう。

第2節 B区の遺構と遺物

1. B南区

土坑

P01 (図版8 写真図版13)

調査区南半で検出した。平面は楕円形を呈し、東西70cm、南北56cmを測る。深さは20cmで断面は浅いU字状を呈する。形状や埋土がA北区SK01に類似し、同様の性格の遺構と考える。

遺物は出土していない。

SK01 (図版8 写真図版13)

調査区北半の西壁際で検出した。平面は長方形を呈しほぼ南北に主軸をもつ。規模は南北1m、東西の検出長0.6mを測る。深さは20cm程度である。底部の形状や埋土から風倒木痕の可能性がある。

遺物は出土していない。

溝

SD01 (図版8 写真図版13)

調査区南半部で検出した。ほぼ南北方向にのびる。南側は調査区外へ続き、北側は調査区中央付近で終結するが、後述するSD02の南端と近接し、本来は同一の溝であった可能性がある。幅の増減が著しい。深さは中央付近で15cm程度、南端では30cm程度になる。

出土遺物

39は土師器甕で体部外面に平行タタキを施す。

SD02 (図版8 写真図版13)

調査区北半部で検出した。ほぼ南北方向にのびるが、北側は東へやや曲がるが削平により浅く肩は不明瞭になりつつある。南側は調査区中央付近で終結する。幅の増減が著しい。深さは15cm程度である。

出土遺物は土師器細片のみである。

2. B北区

溝

S D O 1 (図版9 写真図版14)

調査区南半部で検出した。断続的であるがほぼ南北方向にのびる。南側は調査区外へのび、北側は調査区内で終結する。幅60cm、深さ8cmである。

遺物は出土していない。

S D O 2 (図版9)

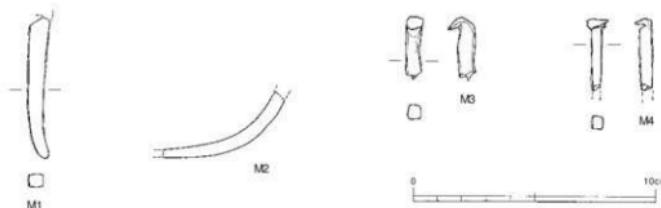
S D O 1 の東側に所在する南北方向の溝である。擾乱などで全容は不明瞭だが、断続的に調査区内を南北端までのびるとみられる。北側は調査区外へ続いている。幅13m、深さ8cm程度である。

出土遺物は土師器細片のみである。

3. B区包含層

40は瓦質土器鍋である。体部の形状は不明だが、口縁部の形状はL字状を呈する。42、43は青磁碗、41は施釉陶器小碗である。

M 4 は和釘である。断面は一辺0.5cm程度の方形を呈する。折り返した形状の頭部が残存する。



第5図 出土金属器実測図



第6図 出土金属器

第4章 総括

1. 出土遺物

調査では遺構を中心に土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器が出土した。まず遺構出土の土器の年代を検討し、隣接調査区との比較を行いたい。

土師器

皿

口径が10~12cmと7~8cmの2タイプに大別できる。『今宿II』では前者は中皿、後者を小皿と呼称しており、その名称を使用する。『今宿II』でいう口径13cm以上の大皿は出土していない。

中皿 ①底部が丸みをもつ碗状をなすもの。SX01・02から出土の11・12・16があり中皿Aに該当か。うちSX01出土の2点は底部に放射状に台の圧痕が残る。14世紀後半に比定される。

②口縁部が大きく外反するもの。SK06出土の33があり、中皿Bに該当か。14世紀後半に比定される。

③底部から緩やかに体部へ続き、口縁部は強めの横ナデにより急に立ち上がる。器壁は比較的厚めである。P30、SX01・02・03、SK04・05より出土の4・7~10・17・19・22・29があり、中皿Bに該当か。14世紀後半に比定される。

④器厚の薄い底部からやや肥厚ぎみの口縁部がのびる。SK05出土の28・30があり中皿Dに該当か。14世紀後半~15世紀前半に比定される。

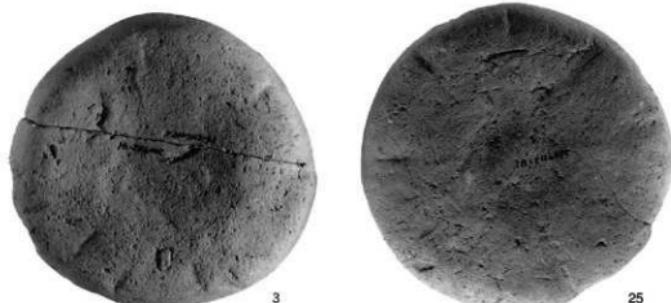
小皿 ①平底からわずかに口縁部が立ち上がるるもの。SX03、SK06出土の20・21・32があり、小皿Fに相当するものか。

②短く口縁部が立ち上がるもので、底部外面に放射状に台の圧痕が残るもの。P22、SX01、SK05出土の3・5・6・25~27がある。底部外面の圧痕から中皿③と同じく14世紀後半か。

③弱いナデで口縁部を仕上げる。SK06出土の31が1点のみである。

鍋

24は口縁端部が丸みもち、突帯貼り付け部内面がわずかにくぼむ。岡田・長谷川分類の「羽釜形タイプ：播磨型」のB系列IA類に該当か。15世紀前半に位置づけられよう。



第7図 土師器皿底部の痕跡

B南区S D O 1出土の39は岡田・長谷川分類の壺タイプI類に該当し、13世紀後半に位置づけられる。

須恵器

捏鉢・壺が出土している。

捏鉢は柱穴から2点出土したが、いずれも口縁端部を上方へ拡張したもの。類例として平成14年度調査区SK27出土のものがあり、14世紀後半に位置づけられる。

瓦質土器

羽釜、鍋、三足鍋の脚部、不明製品が出土した。

羽釜は13・36が岡田・長谷川分類のA系列II類であろう。14世紀代に比定される。

鍋40は岡田・長谷川分類のIII類で14世紀後半。

不明製品は浅鉢と思われるが類例に乏しく時期は判断しがたい。

陶磁器

18は古瀬戸鉢皿である。形態などから14世紀後半から15世紀前半と考える。

出土遺物から検出した遺構の大半は14世紀後半に属するものと判断する。古くさかのぼるものでも13世紀後半であり、今宿II検出の遺構の多くと同時期である。したがって隣接する今宿II調査区検出の遺構と一緒にとなって集落を形成したものと思われる。

本調査区で中世をさかのぼる遺構はA南区のS D O 2がその可能性をもつものである。今宿IIでは弥生時代後期の遺構・遺物を検出しているが、検出した遺構はわずかであり、集落の縁辺地城を検出したものと思われる。本調査区ではこの時期の遺構は検出されないことから、当該期の集落の範囲外であることが明らかとなった。

参考文献

岡田章一・長谷川眞『兵庫津遺跡II』兵庫県文化財調査報告第270冊 兵庫県教育委員会 2004年

2. 遺構

今回の調査区は今宿II調査区に北接しているため、今宿遺跡として調査した。山吹遺跡の調査区とは距離があり、確認調査では削平により遺構は検出できていないが、今回の調査区との間は遺構面を構成する地盤が続くことが確認されており、山吹遺跡の範囲が南まで広がる可能性も否定できない。ここでは今回の調査区をニュートラルなものとして、両遺跡との関係を検討してみたい。

今宿遺跡との関係

a. 今宿I

本調査区ではA南区SX01・03、SK07、SE01から古代の瓦片が出土した。出土した瓦は細片であるが平瓦の凸面の調整は今宿I出土のものと共通する。ただしこれらの遺構は古代まで通るものではなく混入遺物である。いずれも耕作の際に不要となる礫などとともに投入されたものと推定され、規模こそ違うものの今宿Iの瓦集積と意図は同じものであろう。今宿II調査区では7世紀後半に掘削された溝内からも瓦が出土している。

今宿Ⅰ調査区は今宿Ⅱ南側に所在する独立丘陵南麓に位置する。大量に集積された瓦が検出され、検討の結果付近に古代寺院「今宿廃寺」の存在が想定された。寺院の推定地は調査地点の南東側の近距離であり、付近を通過する古代山陽道沿いに所在したものと推定された。

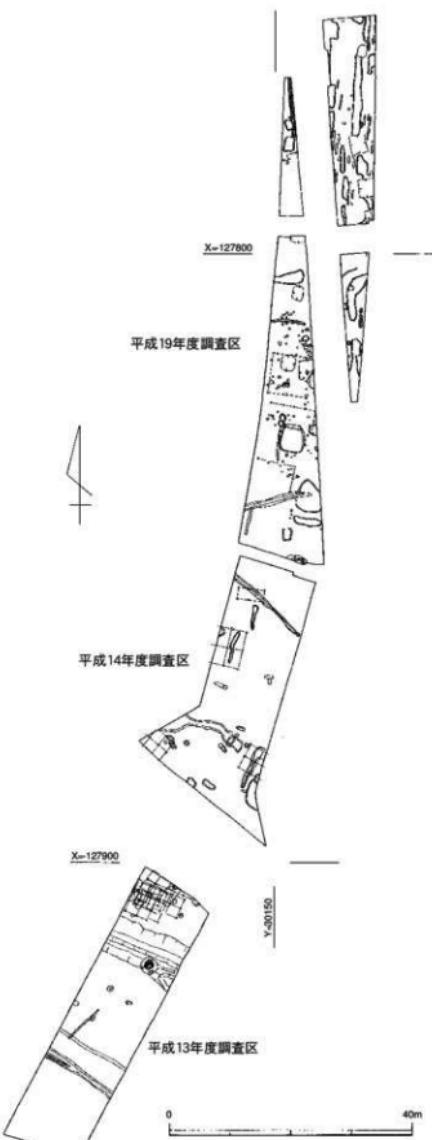
今回の調査も含め今宿Ⅱ調査区以北からの瓦の出土量は今宿Ⅰ調査区とは比較にならず、寺院推定地は当初の想定から変更するまでもなく今宿Ⅰ調査区南東側で間違いないだろう。しかし今宿Ⅰ調査区よりも北側の丘陵により隔てられた場所からも瓦が散布する状況がみとれる。寺院推定地付近の耕作により今宿Ⅰ付近から丘陵をはさんだ北側にまで不要な瓦片を投棄に来たとは考えがたく、また今宿Ⅱ調査区付近は今宿Ⅰよりも地形が高位であることから氾濫など自然の要因で移動したとも考えがたい。

今宿Ⅱおよび本調査区付近で瓦が散布する理由として、下記の2点が考えられる。

①僧坊などの伽藍周辺施設が丘陵北側付近に所在した。

②調査区北西側の振袖山山麓に瓦窯が所在した。

まず①であるが、平成13年度調査区のSD03をはじめとする溝が寺院の時期に近い遺構で、土地区画を意図したものと思われるが、付近で当該期の建物や関連する遺構は全く検出していない。ただし



第8図 今宿遺跡全体図

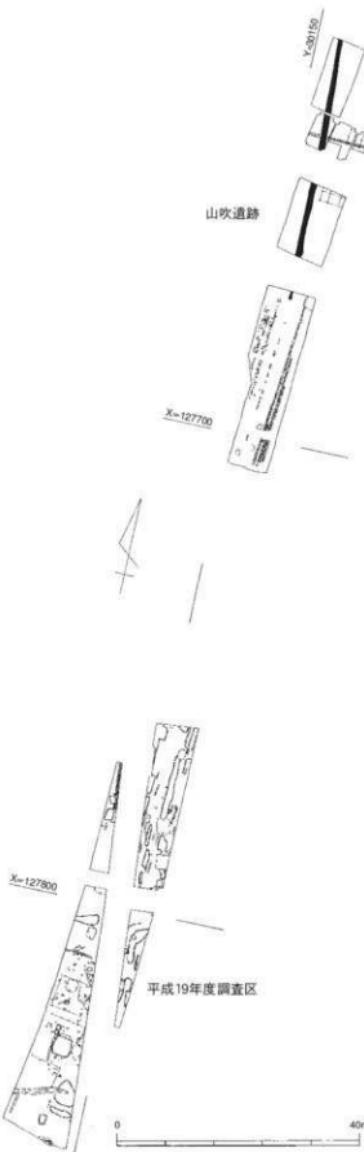
溝内からまとまった土器の出土をみており、付近になんらかの施設が存在した可能性は否定しきれない。

②については、寺院の隣接地に瓦窯を築造する例は知られるものの、現在のところ瓦窯跡の存在を示す遺物などはなく推測の域を出ない。

現状では調査区付近に散布する瓦片の由来については明らかではない。ただSX01出土瓦の中に少數ながら中近世まで下がるものと混じる。調査区付近には高岳神社に関連する寺院、地名に名を残す草上寺など寺院の伝承があり、なんらかの宗教施設が存在した可能性がある。あるいは伝承に残る寺院は衰退した古代寺院の「今宿庵寺」を継承したものだったかもしれない。

b.今宿II

今回の調査区では、多くの遺構は14世紀後半を示し、既調査の今宿II調査区と一体となって集落を構成すると推定する。今宿II調査区の建物群は南半がN25°~35°E、北半はN12°E前後で方向が異なり、本調査区検出の建物は北半の建物に近似する方向を示す。今宿IIではN12°Eを示す建物が13世紀代までさかのばる可能性をもつ。本調査区の建物は出土遺物がなく時期を確定しがたいが、周囲の遺構の示す時期から14世紀代と推定する。したがって建物の示す方向は時期差によるものではなく、地形などの要因によるものと



第9図 山吹遺跡と調査区

思われ、複数の屋敷地で集落を構成していたものと考える。建物の建替えの多い南半部は集落の中心と考えられ、A南区はやや遺構が疎らとなりことから集落の縁辺部であろう。B区は建物などの遺構が全く検出されなかったことから集落の東限、A北区付近が北限となる。

山吹遺跡との関係

最北端の平成10年度調査区では正方位を示す東西および南北溝が検出されている。これら溝の示す方向は周辺の地割とも同方向である。このうち南北溝のSD02は南側にあたる平成13年度調査区SD01、平成16年度調査区SD01と同一の溝と推定され、平成16年度調査区北端まで続く。以南は削平により消滅しているためその続きは不明である。出土遺物から掘削時期は古代と推定される。

山吹遺跡では古代までさかのほる可能性のある溝が少なくとも14世紀代の集落を区画していたことは確実であり、遺構検出面上でも今宿II検出の集落の時期に近い遺物が出土している。

今回B地区で検出した溝は山吹遺跡の溝とはほぼ同じ方向を示す。同一の溝となるかは明らかにしえないが、近似する地割をもつ耕作地に伴う溝として把握することは可能であろう。

今宿・山吹遺跡の範囲

山吹・今宿遺跡を特徴づけるものは古代までさかのほる溝であり、本調査区周辺には方向の異なる2種の地割が残存し、溝などの遺構の示す方向に反映されている。

①主に調査区の北東側にみられ、正方位に近い方向を示す。山吹遺跡検出の溝および掘立建物はこの方位を示すが、北東に位置する辻井庵寺の伽藍はこれに則らない。

②調査区の西および南側にみられ、北東-南西方向に偏りをもつ。古代山陽道と平行し、それを基準とした地割と推定される。今宿遺跡で検出した掘立柱建物、平成13年度調査区検出の溝とはほぼ同じ方向を示す。溝の掘削時期は7世紀後半を想定しているため、地割はここまでさかのほる可能性がある。

今回の調査区はこれら2つの地割が交錯する地域である。A区北側から西側には②の地割、B区東側には①の地割が認められる。この地割を遺跡に反映させれば、①は山吹遺跡、②は今宿遺跡の範囲となり、概ね南北にのびる現道の東西で分けることができるだろう。ただし山吹遺跡平成16年度調査区で検出した鶴溝の可能性がある布掘り状土坑列は②に近い方向を示す。この遺構の所属時期は近世末期以前であり、①から②の地割に変更されていることが明らかである。

2つの遺跡は異なる方向を示すものの出土遺物の時期差は少ないため、方向の違いが時期差を示すではなく、ほぼ同時期に存続しながらも、継承した地割が異なる集落と考えることができる。14世紀代の調査区付近の景観は、南西-北東方向を向く建物で構成される集落の東側に、正方位を向く耕作地が広がっていたのだろう。その後集落間で優劣が生じ、地割の境界付近で②の地割から①地割に変更が行われたことが想像できる。今回の調査区は2つの地割が交錯しているが、南北にはしる道路が地割の境界を踏襲しているとみるとみることができ、あえて2遺跡の境界を設定するとすればこの道路とするのが妥当であろう。

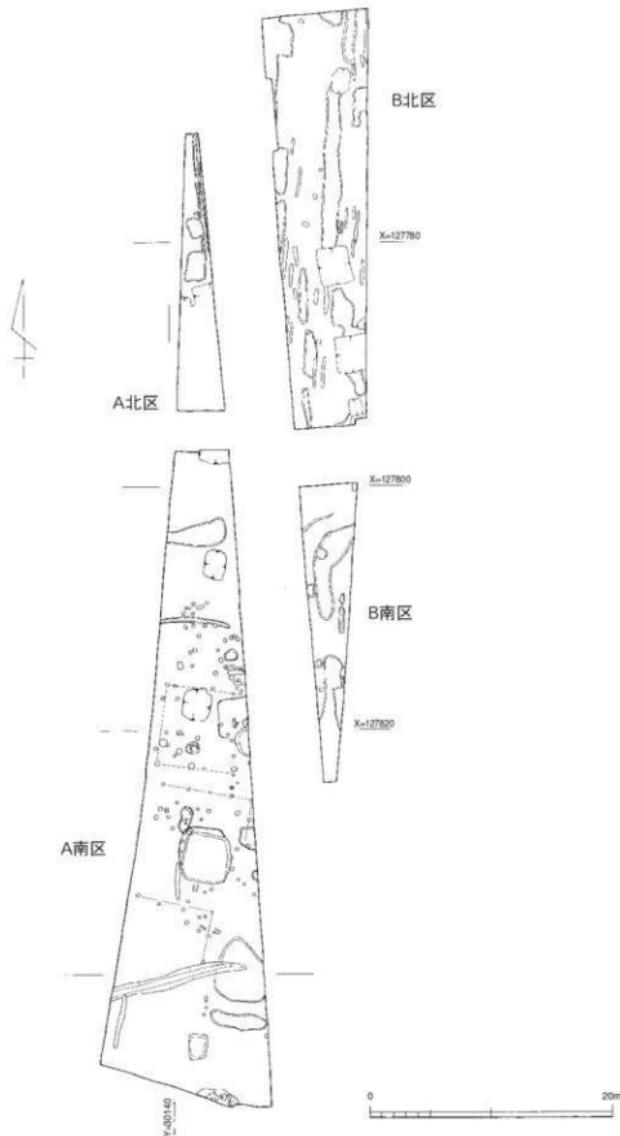
報告書抄録

ふりがな	いまじゅく							
書名	今宿遺跡Ⅲ							
副書名	(都)山吹線事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第395番							
編著者名	長濱誠司・渡辺昇							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒6750142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号							
発行年月日	西暦 2011(平成23)年3月22日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いまじゅく 今宿遺跡	兵庫県 姫路市 西今宿 8丁目	28201	020161	35° 50° 50°	134° 39° 49°	2007.12.18 ～2008.2.21	858m ²	(都)山吹線事業 に伴う
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
今宿遺跡	集落	中世	掘立柱建物・土坑		土師器・須恵器			

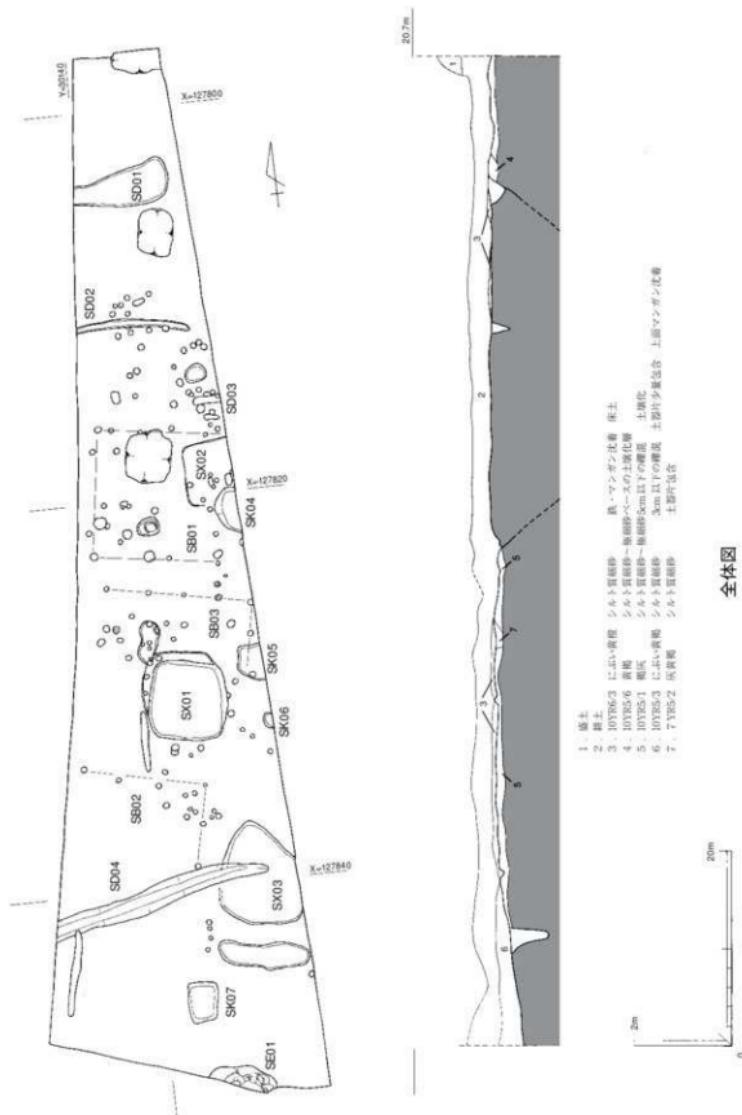
要約

姫路市街地の西側、夢前川東岸に位置する中世の集落遺跡。発掘調査は道路改良工事に起因する。南側の既測定区から続く中世集落を検出し、その北限および東限が明らかとなった。また集落の東側では掘立柱建物と方向の異なる複数の溝を検出した。

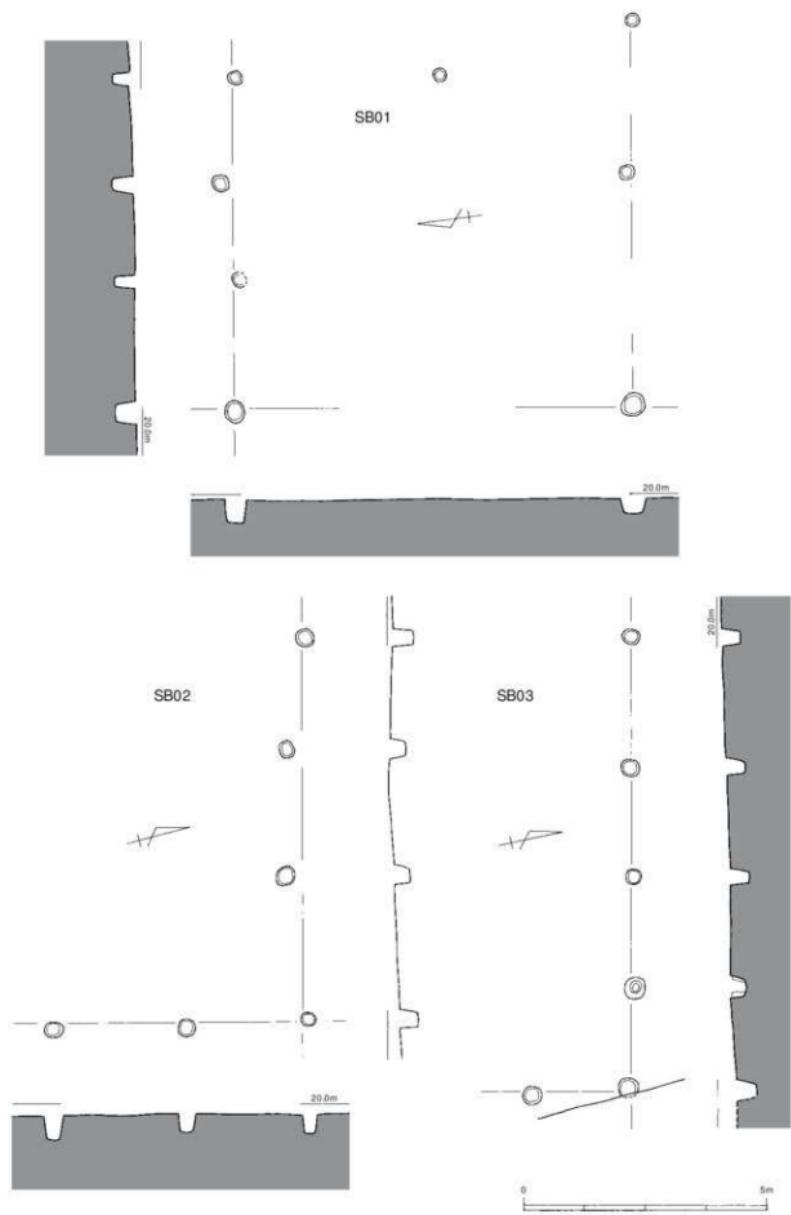
図 版



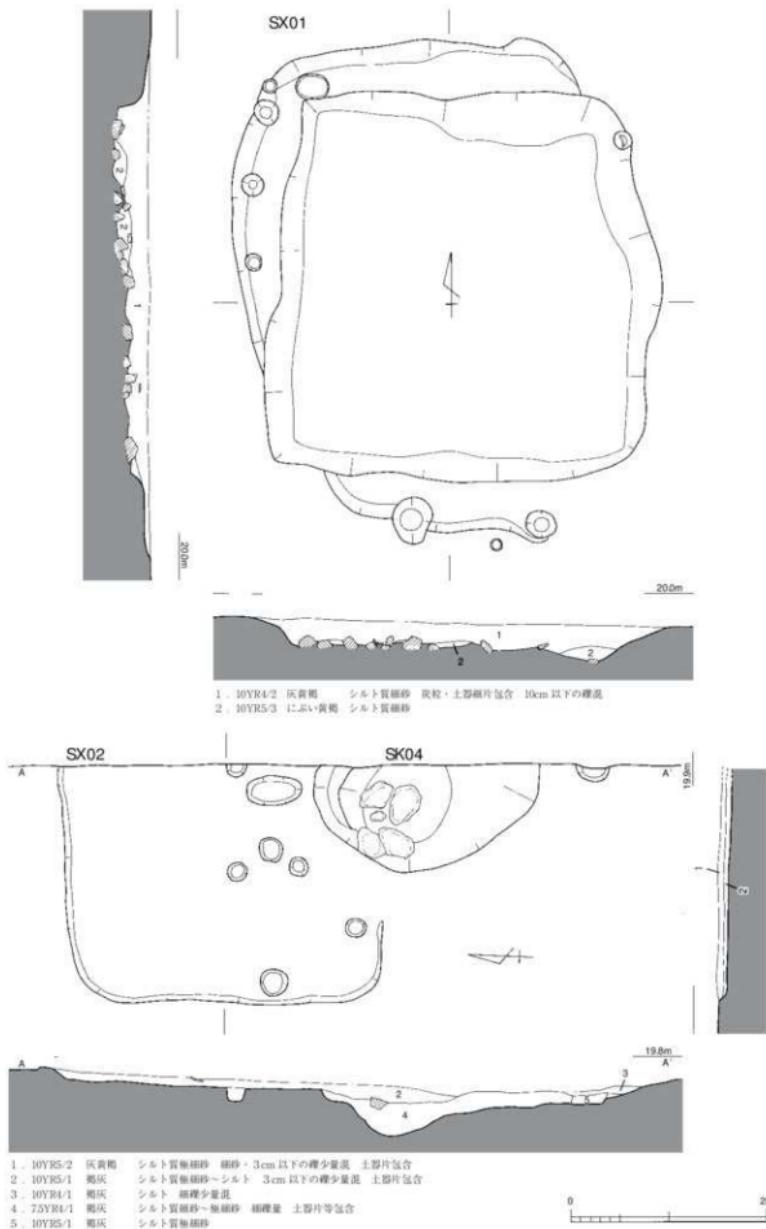
調査区全体図



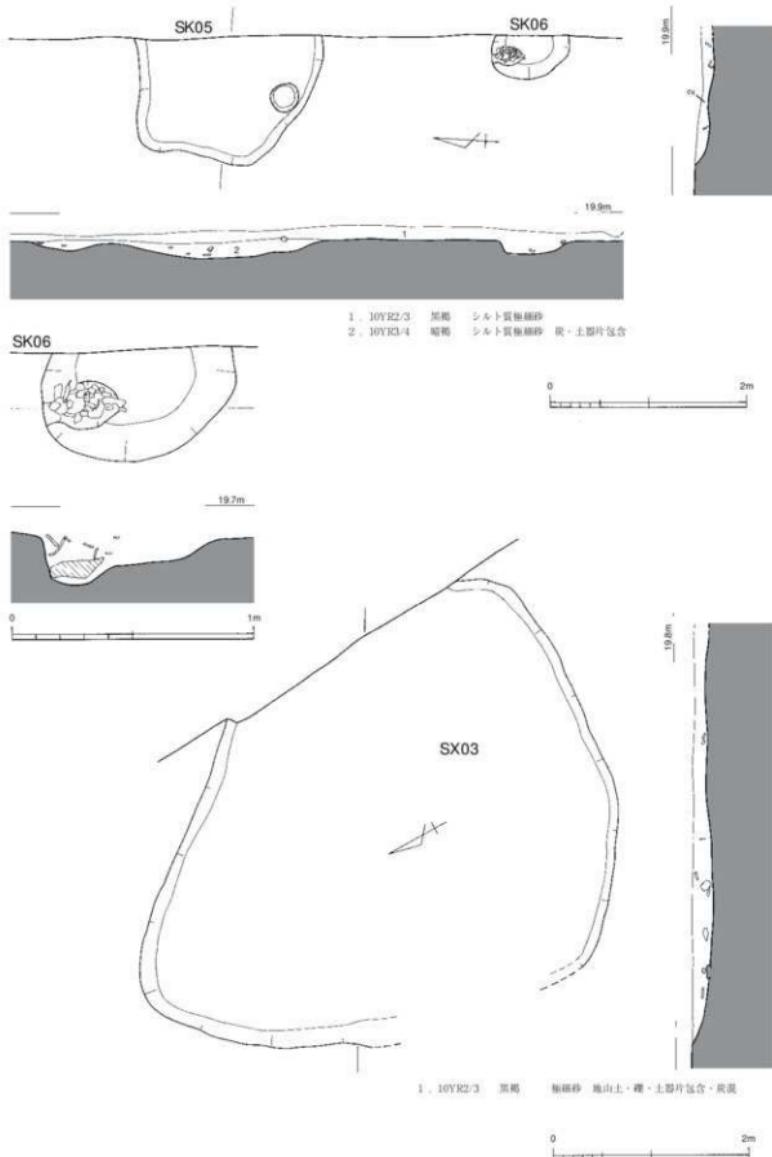
全体図



遺構図（1）

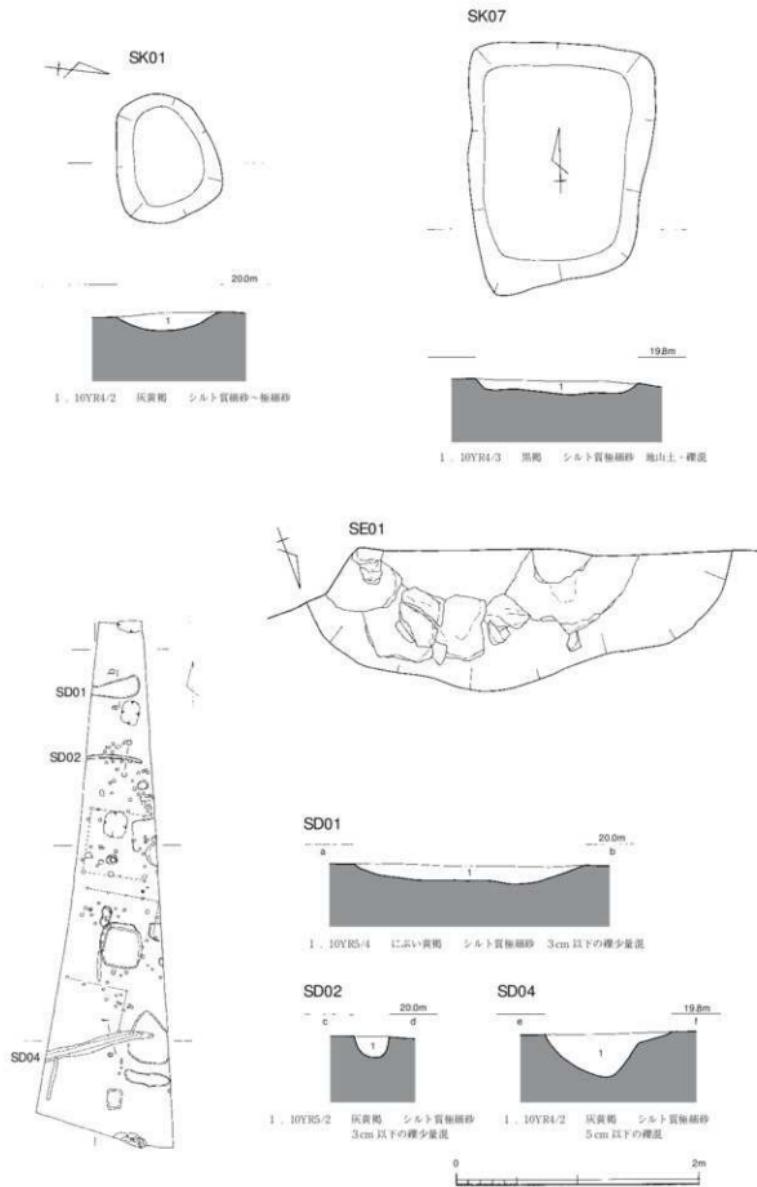


遺構図 (2)

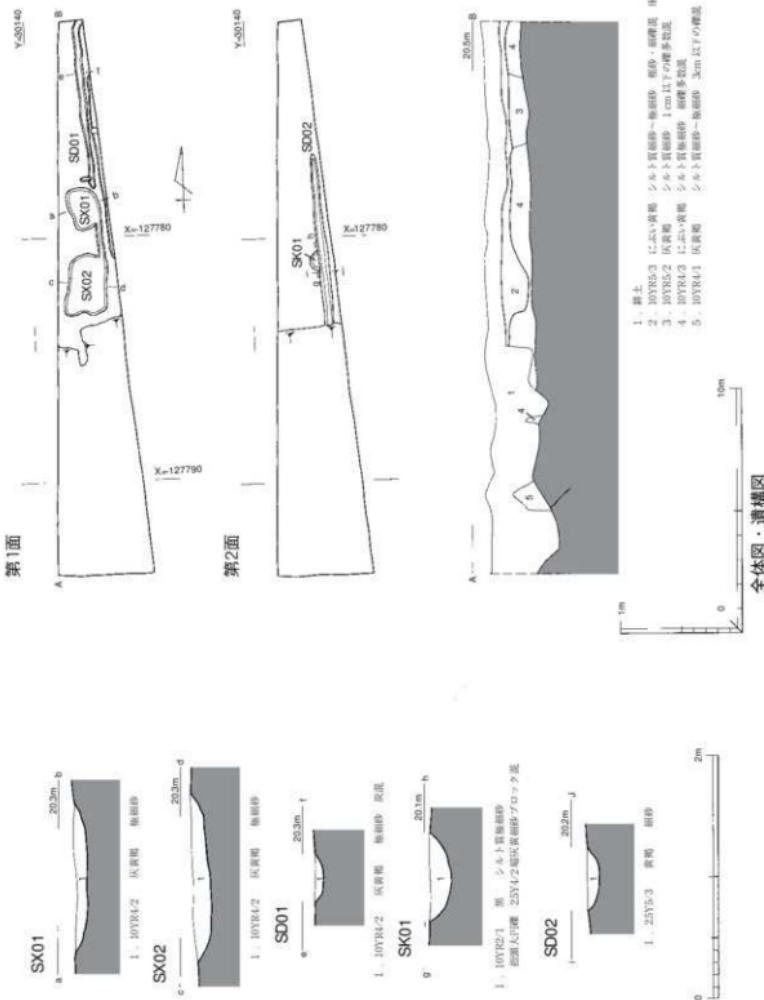


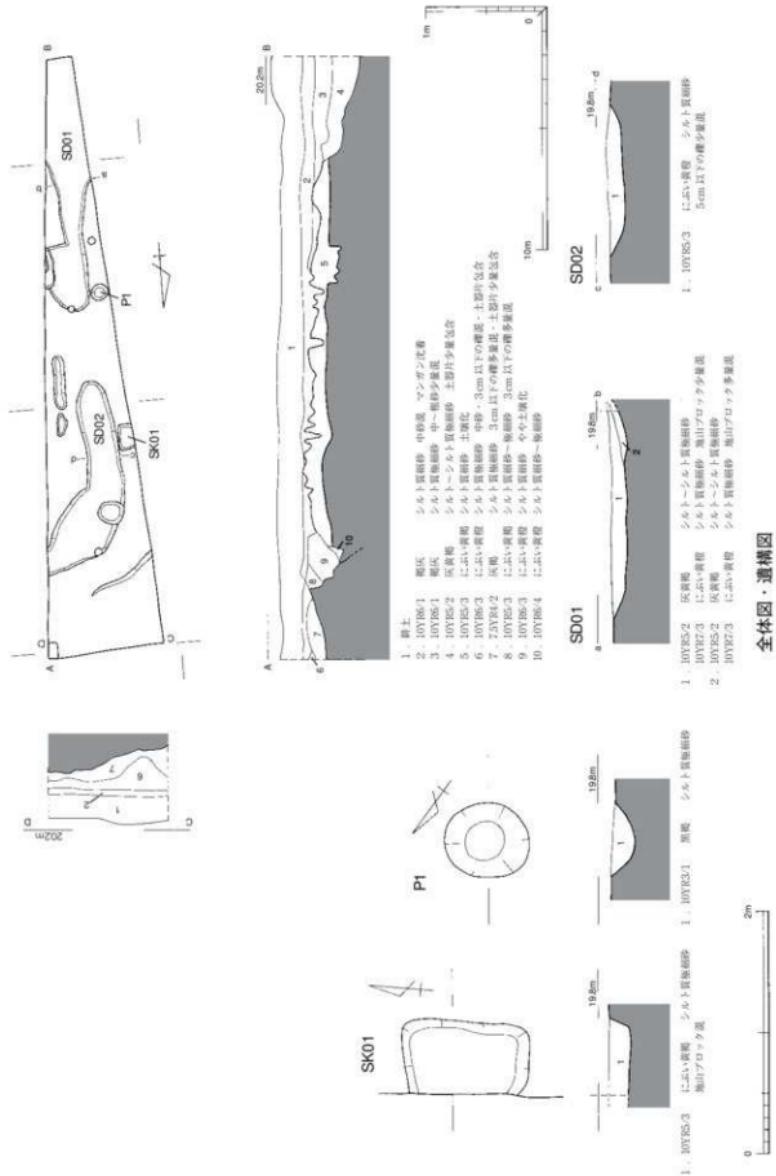
遺構図 (3)

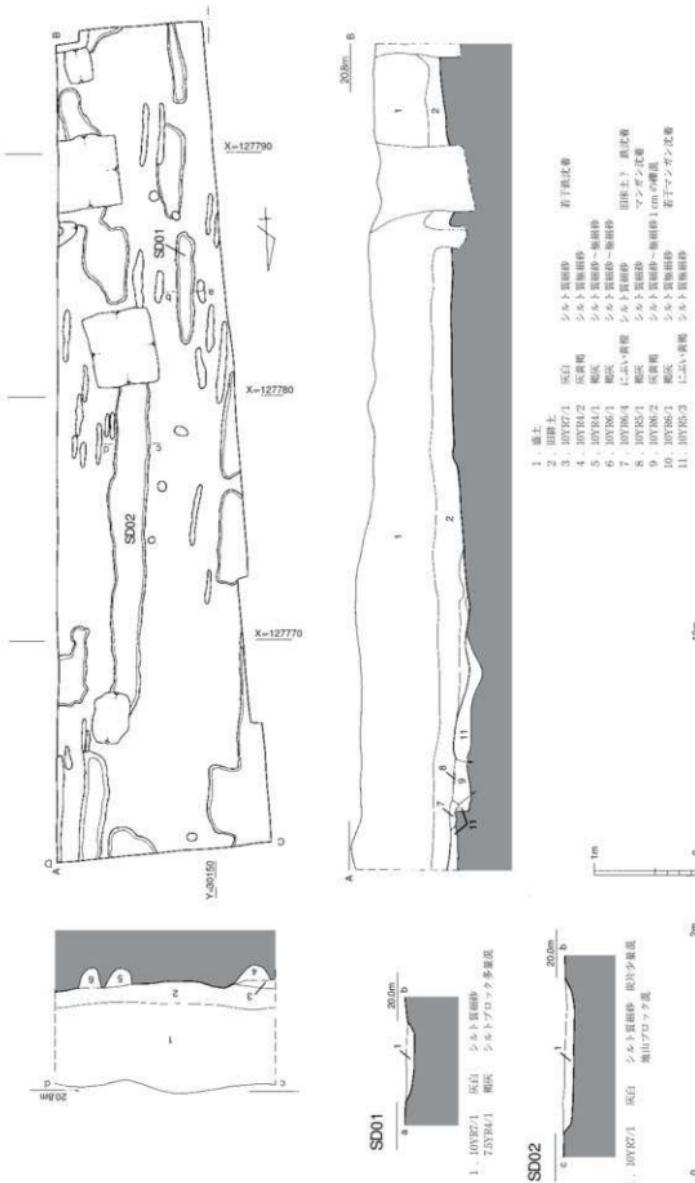
図版6 A南区



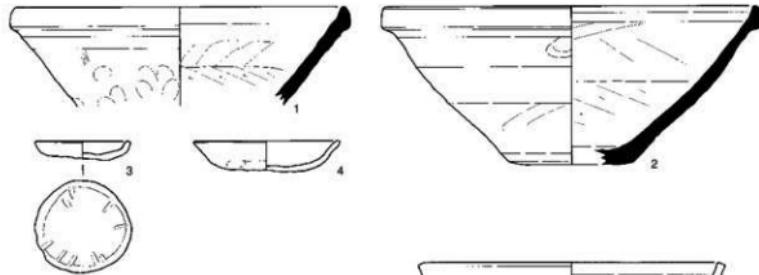
遺構図 (4)



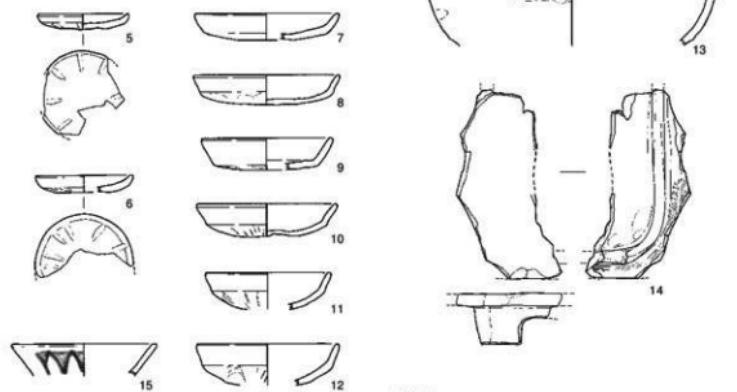




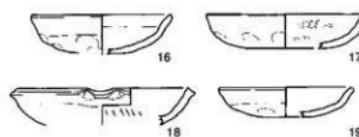
全体圖・遺構圖

A南区
柱穴

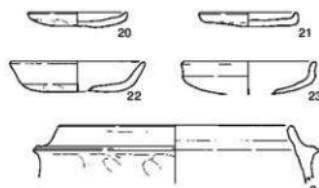
SX01



SX02

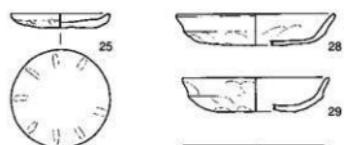


SX03

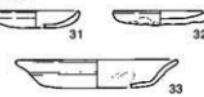


0 20m

SX05



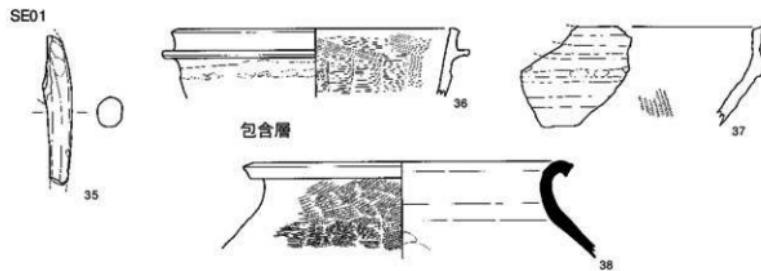
SX06



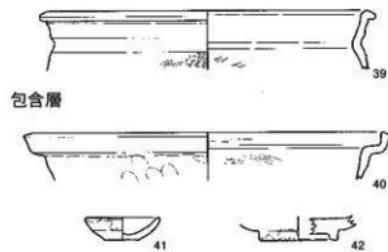
SX07



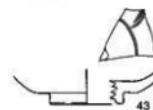
出土遺物 (1)



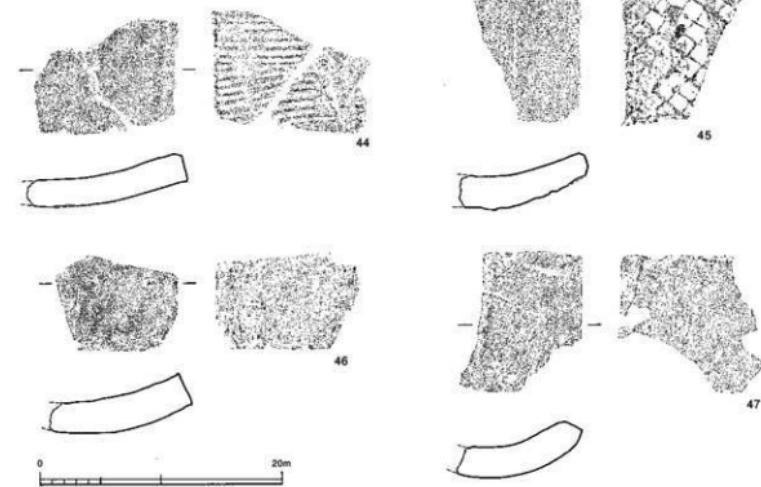
A南区
SD01



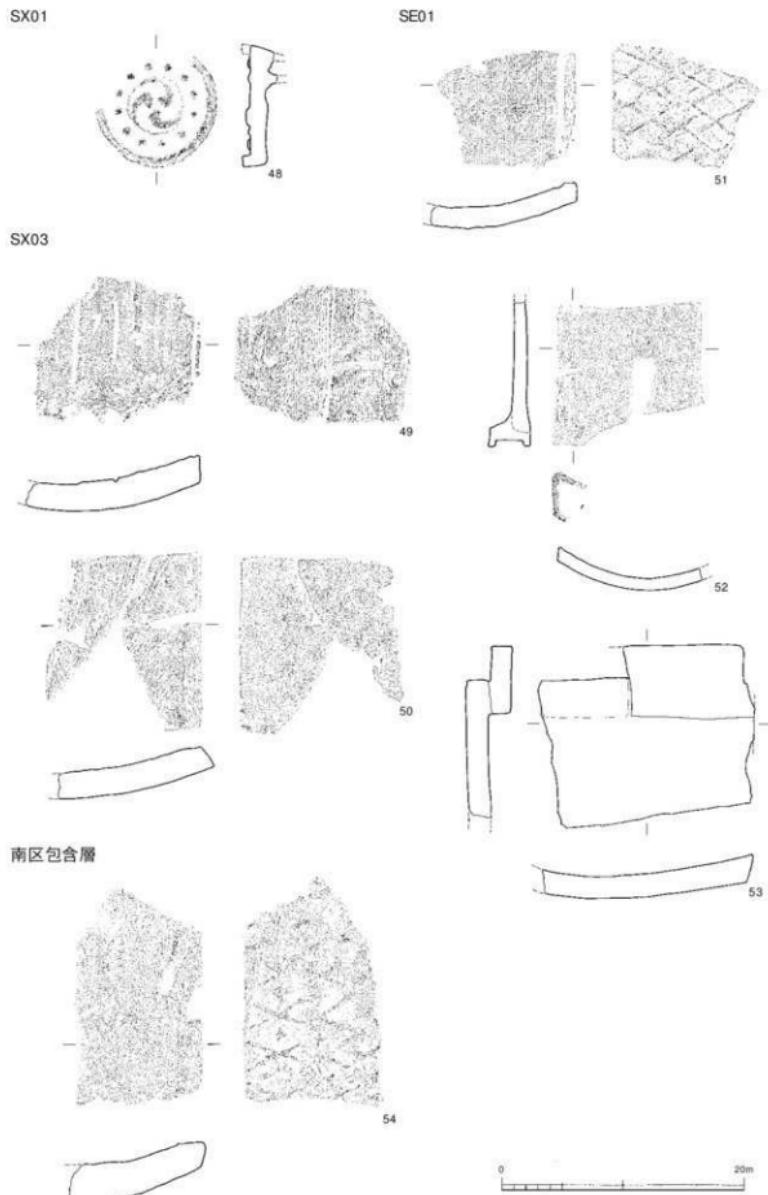
B北区
包含層



SX01



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)

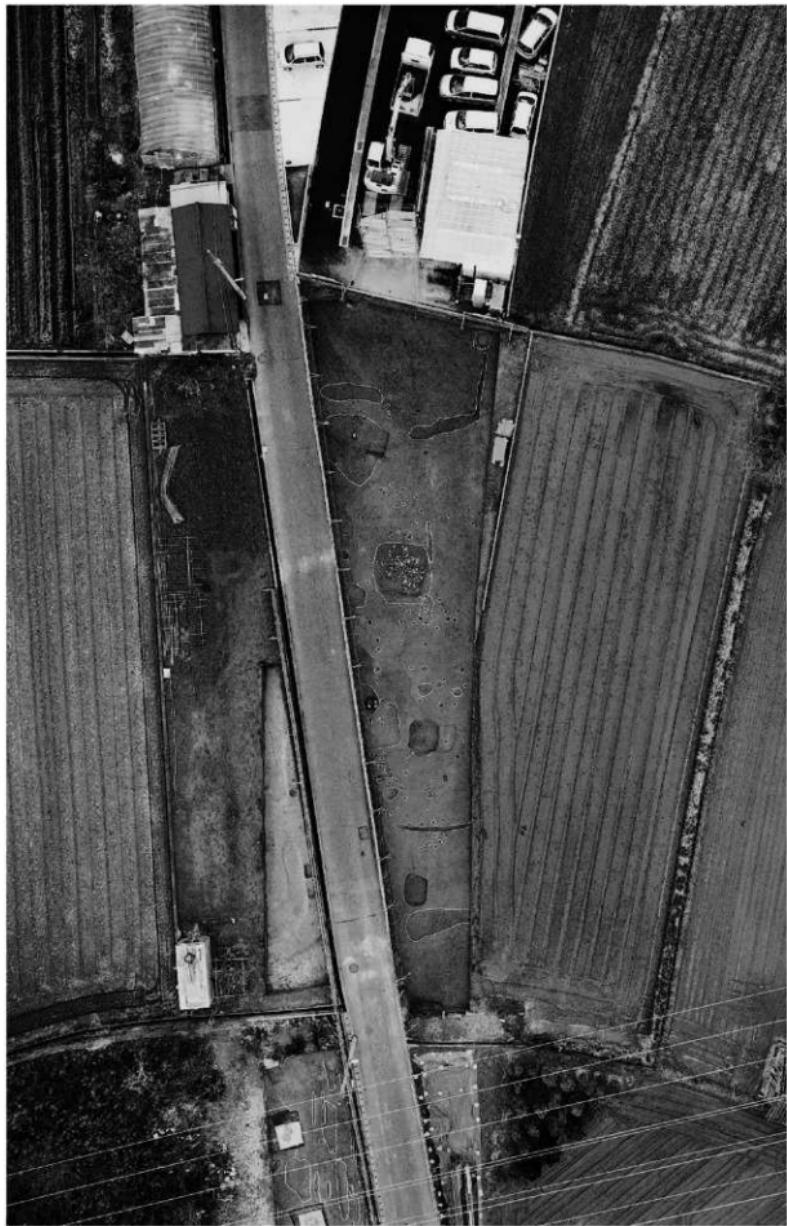
写 真 図 版



遺跡の遠景（南東から）



調査区遠景（北西から）



全景（垂直写真 上が南）



全景（南から）

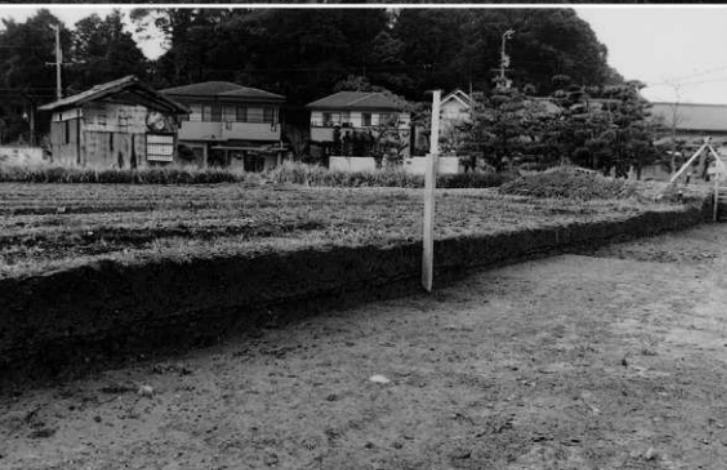


全景（北から）

写真図版4 A南区



全景（南から）



西壁断面
(南東から)



SX01
(南から)



SX01 断面
(西から)



SX01 完掘
(西から)

写真図版6 A南区



SX02 断面
(南から)



SX03
(西から)



SX03 断面
(北西から)



SE01
(北から)

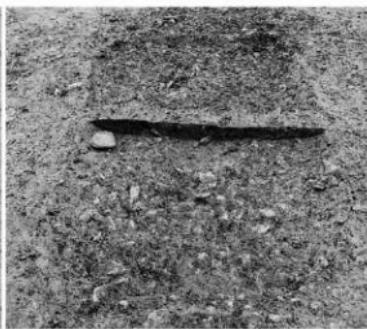
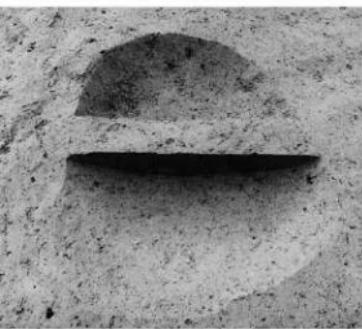


SE01 断面
(北から)

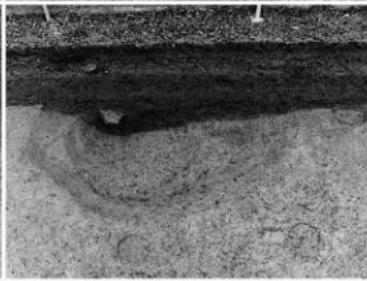


SE01 石組
(北から)

写真図版8 A南区



左)
SK01
(東から)



左)
SK04
鍬検出状況
(西から)

右)
SK04
完掘状況
(西から)



左)
SK06
土器出土状況
(西から)

右)
SK06
完掘状況
(西から)



左)
SD01
断面
(東から)

右)
SD02
断面
(東から)



左)
SD04
断面
(東から)

右)
P22
土器出土状況
(南から)



左)
第1面全景
(南から)



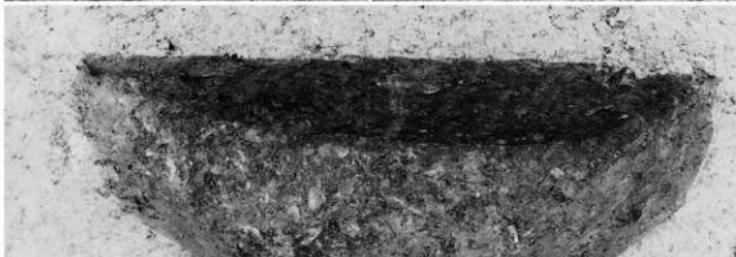
右)
第2面全景
(南から)



左)
第1面
SD01 断面
(南から)



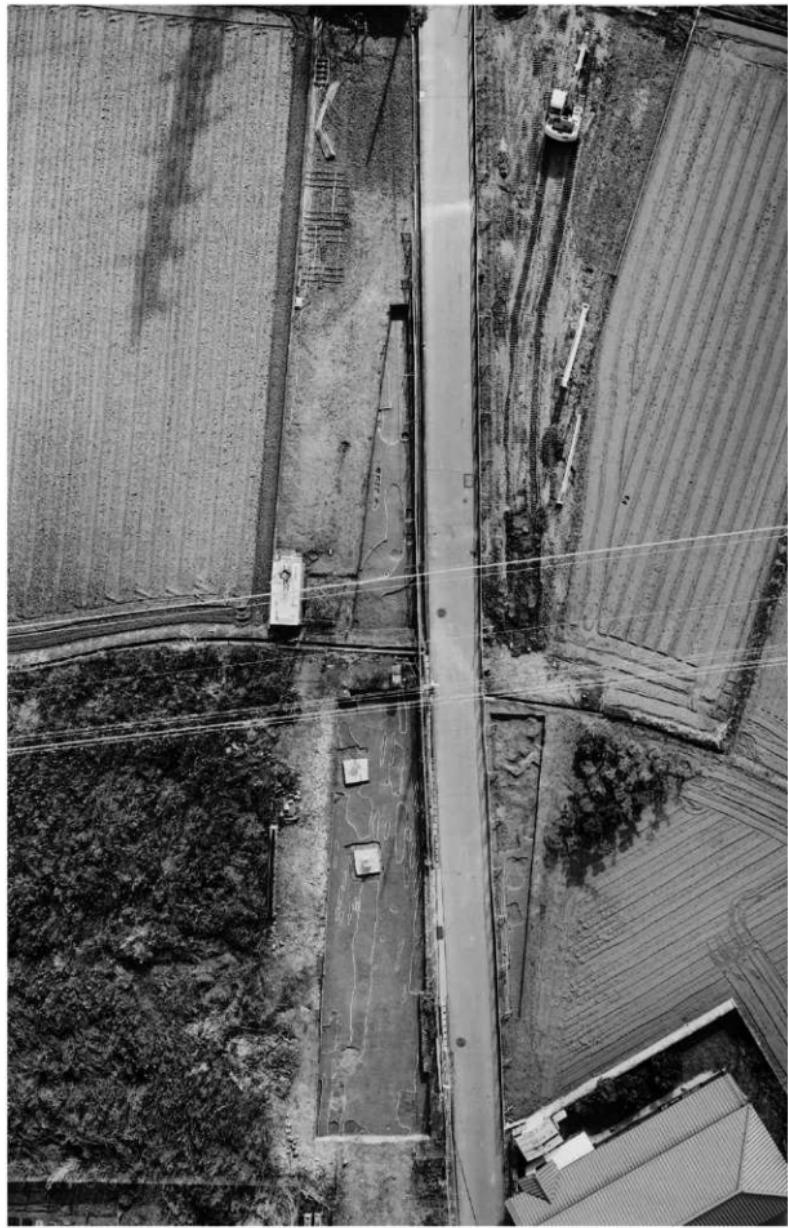
右)
第2面
SD02 断面
(南から)



第2面
SK01 断面
(西から)



西壁断面
(南から)



全景（垂直写真 上が南）



全景（南から）



全景（北から）

写真図版12 B南区



左)
SK01
(南から)

右)
SK07
(北から)

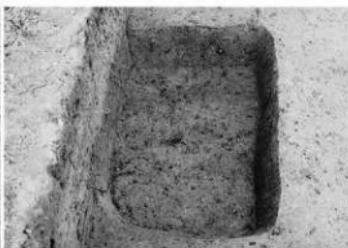
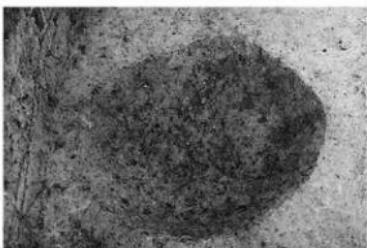


東壁断面
(北西から)



南壁（SD01）断面
(北から)

左)
P01
(北から)



左)
P01 断面
(北東から)



右)
SK01 断面
(南から)

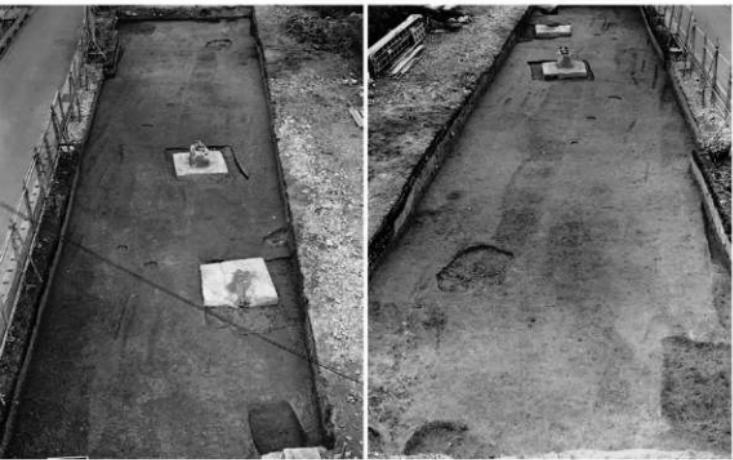


SD01 断面
(南から)



SD02 断面
(南から)

写真図版14 B北区



左)
全景 (南から)

右)
全景 (北から)



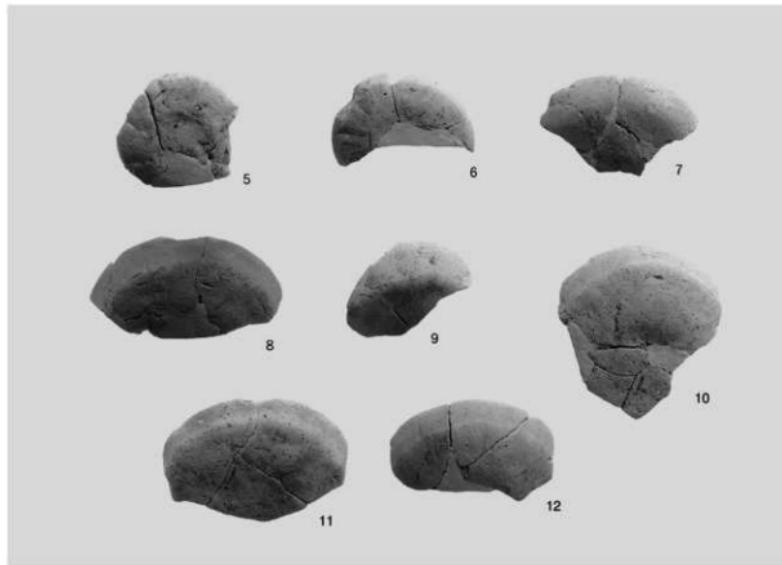
東壁断面
(南西から)



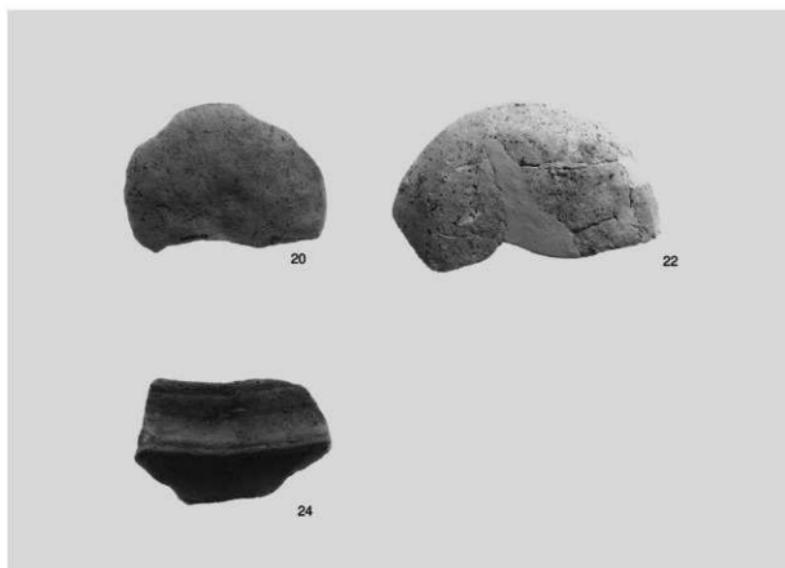
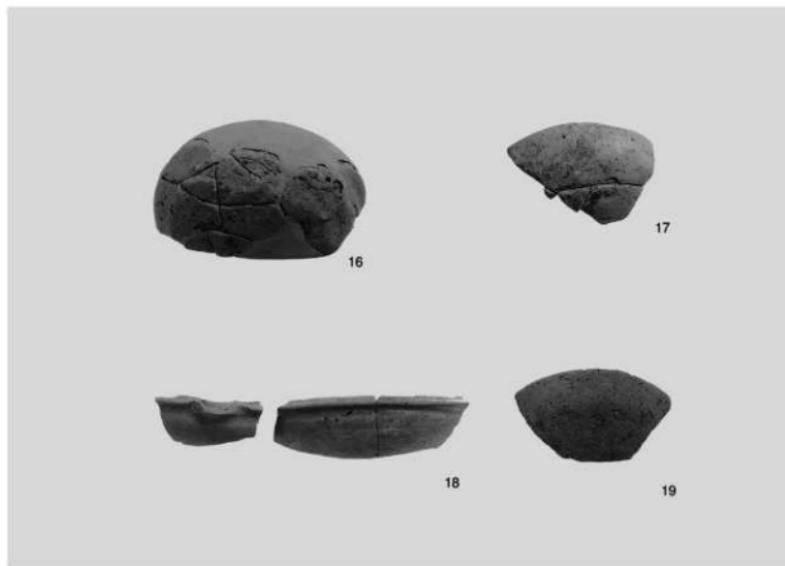
SD01 断面
(南から)



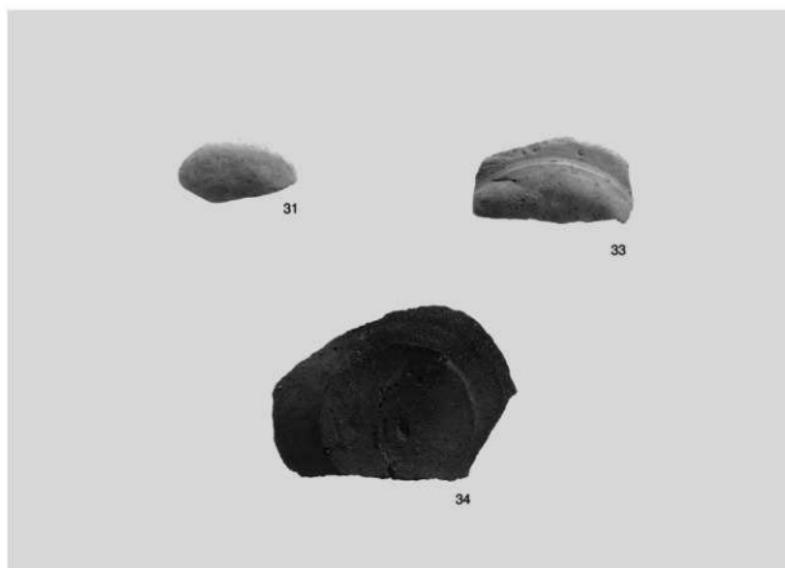
出土土器（1）



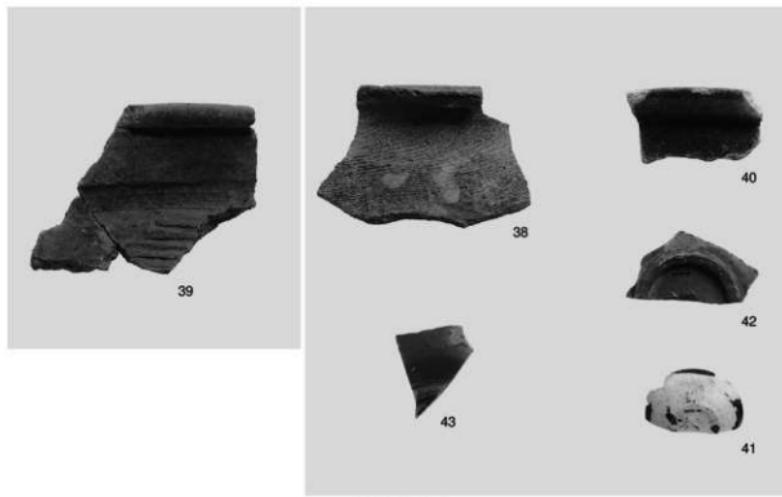
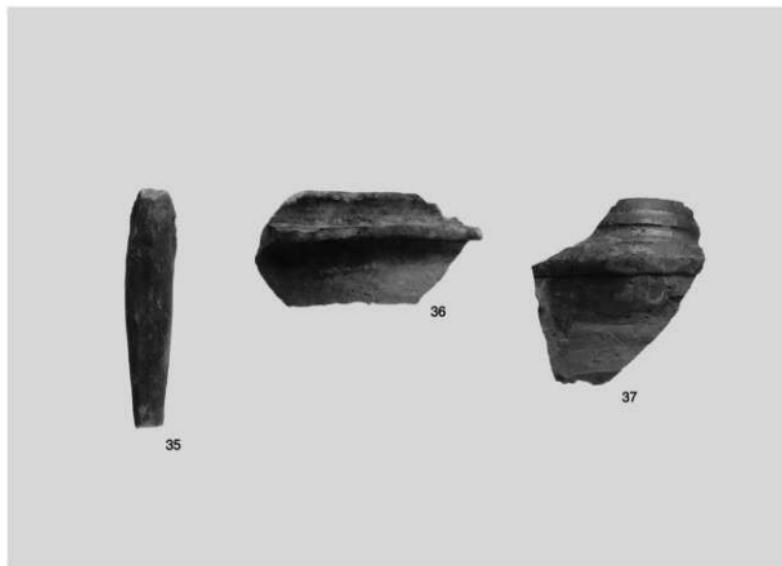
出土土器 (2)



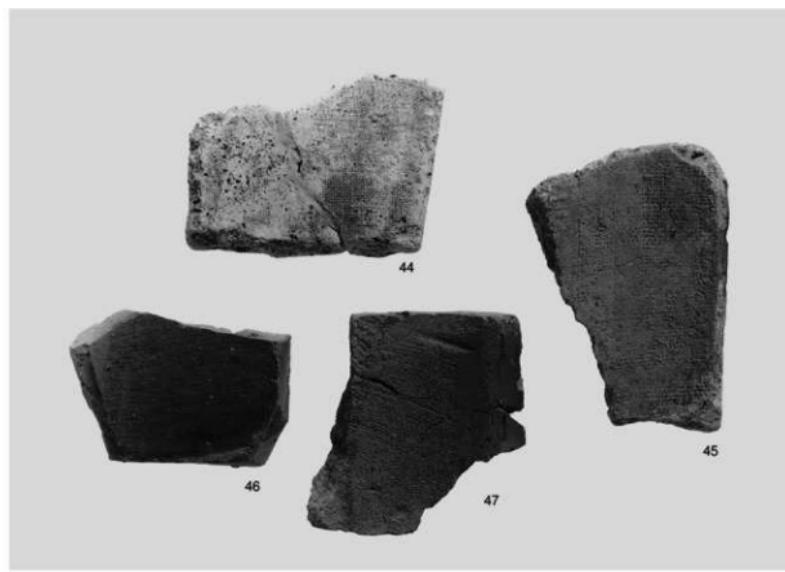
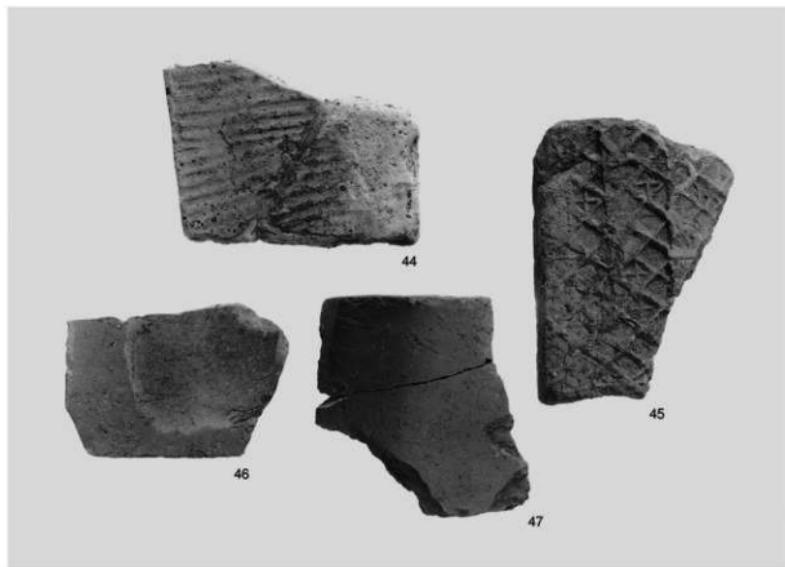
出土土器（3）



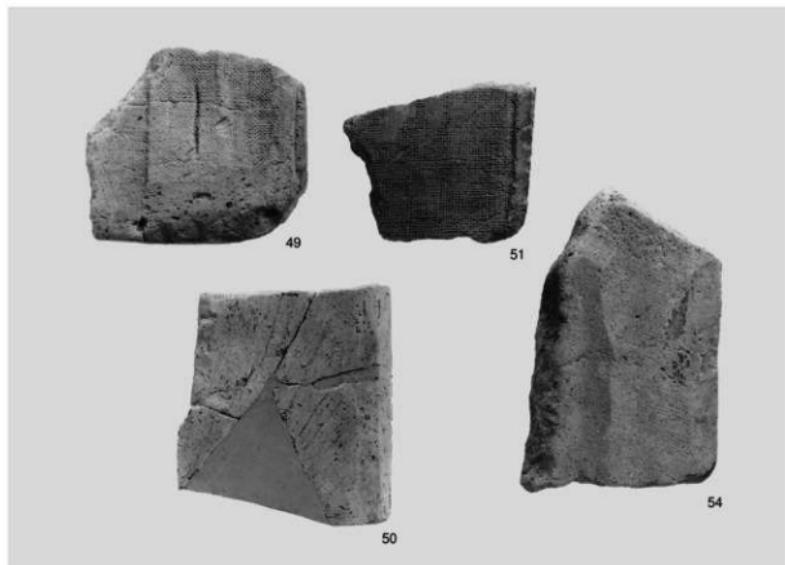
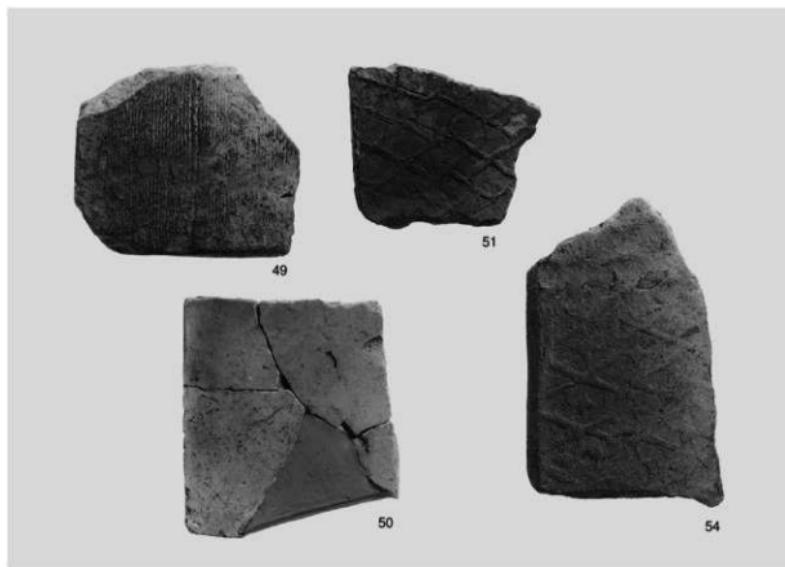
出土土器 (4)



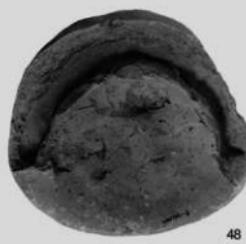
出土土器（5）



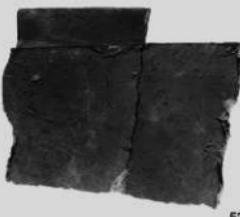
出土瓦（1）



出土瓦 (2)



48



53



52



出土瓦（3）

兵庫県文化財調査報告 第395冊

姫路市

今宿遺跡Ⅲ

(都)山吹線事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23(2011)年3月22日発行

編集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

発行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社ソーエイ
〒673-0898 兵庫県明石市博屋町6-6
